

ムゲンソードアンドシールド

トサカヤキキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ムゲン団の集団幻覚に巻き込まれたので初投稿です。

二次創作の二次創作です。ムゲン団で検索してください。

ヨロイジマクリア推奨です。

描きました

目次

さいしよからはじめる	1
ハロンタウン	8
開会式	18
ブラッシータウン	30
ターフタウン	37
ブラックナイト	44
バウタウン	51
エンジンシティ	58
ラテラルタウン	69
ラテラルタウン2	77
ワイルドエリア	85
アラベスクタウン	94
キルクスタウン	103
キルクスタウン2	111
キルクスタウン3	117

さいしよからはじめる

「一緒にチャンピオンを目指そうな！」

その言葉がいつも私を苦しめる。最初から疑問に思っていたが、その澆刺とした表情と陽気な態度に毒を抜かれて何も言えなかった。

チャンピオンは一人しかねないんだと。だから先にチャンピオンになった時は次のチャンピオンが貴方で、私はその手伝いか、または他のことで、例えばそだてやさんにもなれば良いかなって思ってた。けれど、もう貴方は来なくなった。他の幸せを見つけたのか、既に20年が経っている。

「あの時の貴方に会うよ。ホップ」

・さいしよからはじめる

「ホープ！誕生日おめでとう！」

橙色の髪に翡翠色の吊り目をした褐色の少年は、キユワワーの姿が模された砂糖人形のついたケーキや、豪華な肉料理に囲まれて、その誕生を祝われる。

「もう10歳か！早いなー！」

あたりには、顎髭を蓄えたホープと同じ褐色で目と髪色以外を生写したような中年、父親であるホップと、目と髪色が全くと言っていいほど似通ったホップよりも一回り大人の女性、ソニアがいた。

「ダンデはちよつと遅れるみたいだし、食べちゃおつか」

ホップの兄であり、現在、ポケモントレーナーの猛者たちが集い、熾烈に争うローズタワーの支配人である前チャンピオンのダンデは仕事の関係で居ない。

曾祖母であるマグノリア博士は既におらず、核家族と叔父がホップの家族であった。

「ありがとう、いただきますー！」

大きく口を開けて肉料理を頬張るホープにソニアはかつてのホップを見出し、御馳走に目を輝かせる様子にホップはフィールドワークで新たな痕跡を見つけたソニアを想起する。

どこにでもある暖かい家族の愛すべき日、そして、ポケットモンスターのせかいでは、ポケモンを持ち、ジムチャレンジという困難に立ち向かうという始まりの日でもあった。

「ヤドラン、いやしのはどう」

一方、ローズタワーの最上階で、ジムチャレンジの中でも最たる演目であるチャンピオンカップの打ち合わせが行われていた。一息がついたようで疲労の溜まる面々に、片手に変異したシエルダーを銃のように持った頭頂部が紫色のヤドラン、通称ガラルヤドランがその場にいたものにリラックスと会議で凝り固まった体をほぐすオーラを放つ。

「チャンピオン、ありがとう」

藍色の長髪と光るような琥珀色の目をした中年、ダンデが礼を言う。

ジムチャレンジ中は、ガラル地方がそのジムチャレンジのサポートや試練に回る。普段はローズタワーに来るジムトレーナーや各協賛企業のトレーナー兼従業員が、ジムチャレンジに世間の職業を教える名目で指定の場所に立ち、バトルを仕掛けるため、ローズタワーの来訪者もスタッフも少なくなるため、その調整に出向いていた。

ジムリーダーもまた、メジャーリーグとマイナーリーグと分かれており、メジャーリーグはその都度戦績や昨年の申請された突破率予定との齟齬などといったものから8人が選出され、ジムリーダー全員が集まり、マイナーリーグ降格の是非を聞いていた。

「もう19時ですか。そろそろ一段落しましたし、明日も早い方もいらっしゃるのですお開きにしましょう」

一目で高級とわかるスーツに、柔和ながらも壮絶な人生を物語る落ち窪んだ老け方をした初老の男、前々ガラルポケモンリーグ委員長であり、2度目の就任となったローズが解散の意を示す。

それに対して殆どのジムリーダーが同意する。かくとうタイプは朝の鍛錬、草タイプは家業の関係で、ほのおタイプは抗えぬ年齢により、フェアリータイプ前任者の介護のため。それぞれのルーティンが

あり、ポケモンや他人が関わると、それを犠牲にするわけにはいかなかった。

「では失礼するよ」

「チャンピオン、睡眠不足はお肌の敵よ」

「ぼくもターフタウンは少し遠いんで」

「ポプラさんが待つてますので」

「では、失礼します」

かつてチャンピオンが齢10歳の時に打ち負かしたジムリーダーたちや、同じジムチャレンジャーであった現ジムリーダーが退出し、そこにはチャンピオンである茶色の髪に白いマクロコスモスのロゴのついたマントを羽織った少女のような女性、ユウリとローズ、ダンデ、ローズとユウリの秘書である化粧により疲れを隠しながらも涼しげな顔で佇む女性、オリーブが残った。

「チャンピオン、お疲れ様です」

「いえ、仕事ですので」

チャンピオンになり、20年近くが経とうとしている。にも関わらず、10歳の頃からそのまま2、3年老化しただけのように見える外見のユウリは、ヨロイジマで加わったヤドランをボールに戻し、人心地つく。

「今年もなんとかシャツチャレンジを始められそうですね」

「俺の頃より様になってるな」

「ローズ様とチャンピオンの手腕が有れば当然かと」

「皆さんのサポートのおかげですよ」

ローズがかつて引き起こしたブラックナイトと呼ばれる人為的な天災の後処理、ローズタワーを改装し、敏腕トレーナーが集まるバトルタワーの設立、ダンデと同じく最年少のチャンピオンの就任と目白押しであったポケモンリーグは、表向きはわずかの期間で収束した。

チャンピオンであるユウリは、チャンピオンとしてふさわしい体力を身につけるためという理由から、ポケモン道場のあるヨロイジマと、その後はチャンピオンレベルが相応しいという調査難易度とされた冠の雪原へ行き、力を蓄えたとした。

実際は度重なるアクシデントとマスコミからくる重圧から、若いチャンピオンを逃す目的と、チャンピオンが赴いたポケモン道場という新たなジャンルと伝説と称されるポケモンが多数存在する雪原に関心を向けさせるためのパフォーマンスでもあり、かつての規模でジムチャレンジが行われたのは、3年後のことであった。

その停滞した影響と世間からの風当たりで未だにジムリーダーが変わっていない。50年以上ジムリーダーを務めたポプラは例外としても、20年間複数のジムリーダーが変わらないというのは、それだけ世間がジムリーダーを指さなくなつたという裏返しでもあつた。

「今年のジムチャレンジにはホープもいるから見逃せないな！」

ダンデが甥のことを高らかに話題にあげる。ユウリの表情は変わらないが、オリーブの眉は、化粧によつて殆どが書かれているにもかかわらずピクリと動き、ローズは指をぴくりと動かす。

ユウリはおもむろに、モンスターボールを取り出し、正面に座っているダンデに手渡す。

「では私からの激励ということ。推薦状はダンデさんからでしょう。私が頂いたように彼にも。私は残務がありますのでこれで」

「私もチャンピオンの補佐で」

「お疲れ様です」

「またバトルしようぜ！」

足早に席を立つ2人が居なくなると、残された2人もゆっくりと席を立ち、エレベーターへ向かう。

「さて、チャンピオンの心労にしたくない話をしましょうか」

「ジムチャレンジャーからねがいぼしを奪おうとする連中か」

「ええ。確かムゲン団、とは言つてもその過激派とのことですが。注意してください。それでは」

「ああ、来週の開会式で」

ダンデは屋上に向かい、ローズは下層に行く。ダンデはリザードンによる移動を行つてアーマーガアのタクシーよりも早くホープ一家の元へ行く予定だ。

「いくぞ、リザードン。バースデータイムだ」

往年の傷痕が多くなったりリザードンを繰り出す。キョダイマックスが出来る特殊な個体ということで、その影響か老いを感じさせず、むしろ傷さえも少年の擦り傷のような生命を感じさせる。

ダンデは、その上質な燕尾服じみた服装の上から上着を着込み、そらをとぶ。

20時に差し掛かろうとした時に、ホープの住まいのチャイムが鳴る。ホープは勢いよくドアに走り、来客を出迎える。

「ダンデ伯父さん！」

「ホープ、遅れてすまない！誕生日おめでとう！」

似通った調子をもつ2人は高いテンションで笑い、ダンデはホープを胴上げする。

「兄貴、お疲れ様」

「今日は道に迷わなかったの？」

「ホップ、ソニア。今日はリザードンでまっすぐ来たから迷ってないぞ！」

誕生日パーティーの第二幕がはじまる。

「そうだ、ホープこれが推薦状だ」

ダンデからジムチャレンジの推薦状が渡される。ホープはそれを大事そうにジムチャレンジ用の鞆に詰める。

その様子にポップは、何ヶ月も前からこれなんだと苦笑し、ダンデはかつてのホップみたいだと笑う。

ひと段落し、ダンデはホープの手持ちがいるかをホップに尋ねる。「いや、いないぞ。俺のザマゼンダとはよく遊んでるけどポケモンをバトルしたことも捕まえたこともない」

「そうか、それは良かった。実はユウリからホープへのポケモンを預かっててな」

「ユウリが！なんか嬉しいな！」

まるで年齢を感じさない兄弟の会話を、隣でほんの少し微妙な顔つきながらも安心したようなソニアがコーヒーを啜る。夜であるが、論

文の執筆をしたいがためだ。

ダンデは、ホープのところに向かい、モンスターボールを見せる。

「ホープ！チャンピオンからのプレゼントだぜ！」

「まじで！チャンピオンから！やったー！」

ホープはチャンピオンについて知っていることは、「無敗の女王」「無限の若さと力を持つもの」「全ての強さをもつもの」とユニフォーム姿を知っている程度で、ホップの幼馴染みということは伏せられていた。それはホップたちのホープがそれを自慢してやつかみを受けてるのを防ぐためでもある。ダンデも非常に大きな功績はあったが、それ以上に圧倒的な強さと姿の変わらない神話性がガラル地方と伝統と実力を重んじる風潮で神格化されており、ダンデが国民的アイドルで有ったならば、ユウリはガラルの象徴であった。

「よし、ホープ、ボールを開けてみるんだ」

「うん！出てこい！ポケモン！」

「ヒバニー！」

ホープがモンスターボールをなげ、眩い光線とともにポケモンが姿を表す。それは、真っ白な体に赤いコントラストの入ったポケモン、ヒバニーであった。

ホープはヒバニーをてにいれた。

「ヒバニーか！速さと攻撃力が高くなるほのおタイプのポケモンだな」

「ホープ、今日はヒバニーと一緒に寝たらどう？ポケモンはまず仲良くなるのが大切よ」

「うん！分かった！」

楽しい時間は過ぎ、ホープが普段眠る時間に至る。

「それじゃ俺は帰るぜ」

「ああ、ありがとう兄貴」

「ジムチャレンジャーの活躍、楽しみにしてるぜ。ホープ」

「うん！俺がチャンピオンになるんだ！」

その声にかつての自分たちを思い出し、ホップ兄弟は快活な笑みを

浮かべる。ソニアも柔らかな笑みを浮かべ、ダンデを見送る。

・なぞのばしょ

「良いのですか？恋敵だった人の子にあのポケモンを与えて」

仕事を終えたローズは老いによって軋む体を動かさし、とある場所に至る。数多の願い星が巨大な試験管に浮かび、柱のようになっていく。その神殿を思わせる室内には手で何かを掴むような刺々しいデザインが描かれている。

「初恋だった人の子にポケモンをあげてるんです」

後ろ姿は少女であるが、その声は哀愁が浮かんでいる。その手には天高く手を伸ばし、ポーズを決めるホープによく似た少年のリーグカードがあった。

「ホップ、貴方の夢叶えるから」

その女性の瞳は、何よりも薄暗かった。

ハロンタウン

まどろみのもりに隣接したハロンタウン、緑との調和が取れた田舎町でありながら、前チャンピオン、および現チャンピオンの出身地であることから、この20年間で拡大した町だ。特に特徴的なのは、まどろみのもりでチャンピオンユウリが捕まえたというザシ안의伝承が再度精査され、専用の施設までできたことにある。

その運営はマクロコスモストラベルというマクロコスモスという大企業の一つの子会社である。自分たちの負の遺産とも言えるブラクナイトに関しても綴られており、少年たちにはかなり濁した伝え方をしている。

その始まりの場所とも言えるハロンタウンとホープの自宅のあるブラツシータウンの中間に存在する1番道路で、ホープはヒバニーと歩いていた。

開会式までは4日あり、それまでにヒバニーを強くし、まどろみのもりでまた新たな仲間を手に入れる寸法だ。

10歳を超えているためにポケモンはゲットできるし、ダイマックスバンドやポケモン凶鑑は母親であるソニアに渡されている。まどろみのもりは危険なためにソニアたちから行かないように念を押されていたが、子供心が勝り、ザシ안의伝説について調べるという理由でハロンタウンに向かっていた。

詰まるところ、4日間を悶々と過ごしたくないだけであり、こうして散策している。1番道路はジムチャレンジャーがポケモンを捕まえるのに最適で、ポケモンの基礎を学ぶことが多いため、立ち上げた小さなショップが出来ていた。

老人が経営しており、週に2、3日開いているが、ジムチャレンジャー期間は毎日開いていて、キャンプに慣れていないチャレンジャーは最初の外泊という意味でショップの近くのキャンプスペースでショップの支援を受けながら泊まる。

「無限の未来へ！ ムゲン団」

ショップの壁に貼られたポスターが目に入る。

ムゲン団は、マクロコスモスの一部から派生したものであり、企業などと違い、賛同したものが支援する形で入る、相互扶助のものである。

ムゲン団は、エネルギー事業における技術提供や技術開発と、ポケモンや児童保護と言った福祉・経済の両方でガラル地方を盛り上げるという理念を掲げている。

そのトップが誰なのかは明確にされていないが、入るもの拒まずということから最近過激派がいるとの噂を聞いた。

「無限の未来ってなんだろうな！ヒバニー」

ヒバニーは、それを聞いて首を傾げ、少し考えたあと、分からないのか足元の小石をなぶる。2, 3日の付き合いであるが、このヒバニーはようきで、小石を蹴る癖がある。それを見ながらホープはヒバニーをボールに戻し、ショップの中に入った。

「いらっしやい」

老人は久々の来店者なのか少し声を大きめに張り上げて出迎える。内装は木造の古民家を改装したような形で、1番道路の雰囲気合っていた。

店の中では老人と、全身が金たわしのように硬い毛で覆われたガラリニャースが商品を運んでいた。

「モンスターボール下さい」

「ん、ジムチャレンジ前の特訓かい？」

「うん！」

「そうかい。じゃあおじいさんからの応援でタダで10個ほどあげよう」

「え？良いんですか!？」

モンスターボールは1個200円ほどで安価だが、それはポケモンリーグからの支援が適応されている価格であり、ジムチャレンジが終えた人間は、その10倍くらいの価格になる。研究者であるホップが大人がモンスターボールをかうと高いと聞いていたことを思い出し、慌てる。

「なに、わしも君くらいの孫がいたからな。そういう気分になるん

じゃ」

「でもなんか悪いし」

「あのデリバードも孫のポケモンだったんじゃが、アルバイトの代わりになつとるし良いんじゃ」

そう言つて老人はモンスタールボールを10個ホープに渡す。デリバードもどこか懐かしいようにホープの元に歩み寄り翼で腰あたりをポンポンと優しく叩く。ホープは、じゃれつくデリバードを持ち上げたり、撫でる。デリバードの幸せそうな顔を老人は、しばらく見ていると不意に扉が開き、ホープよりも少し年上に見える眼鏡をかけ、茶髪を肩まで伸ばした地味めの服装にワンポイントが入った小綺麗な少女が来店する。

「いらつしやい」

彼女が2人を見ると、少し驚いたような寂しそうな顔を一瞬見せ、老人の方に向かう。

「回復の薬25個と元気のかけら10個、あとなんでも直し5個下さい」

トレーナーカードを渡しながら高価な道具を大量に購入していくが、老人は慣れたように道具を渡していく。

「おねーさん、金持ちなんだな」

「…ちよつとバトルで勝つてね」

ホープが幼心に反応すると、女性は軽く笑い、髪をかきあげる。その所作と同年代にはない香水の香りがホープの鼻をくすぐり、どきりと心臓が鳴った。

女性は老人に向き直り、ホープが見たこともない金額を財布から出して商品を鞆に入れる。

「いつもありがとうございます」

「いえ、家から近いから重宝してます」

「おねーさんもブラッシータウンの人？」

「いいえ、ハロンタウンよ」

「俺、ブラッシータウンのホープ！俺もハロンタウンに行く予定だったから一緒に行かない？」

女性は一瞬驚いたような困惑したような様子を浮かべたが、了承する。

「グローリア、よろしくね」

その笑った顔は、どこか儂げであった。

老人の店を出たあと、2人は様々なことを話していた。とは言っても、ホープがジムチャレンジ前に特訓していることとか、一方的に自分の夢を話していただけだが、子供特有の警戒心のなさか、それとも別の親近感があったからか、打ち解けていた。

相槌を打つグローリアもその一つ一つに衝撃を受けているようで、大人な女性のイメージに対して少しオーバーなリアクションがホープにとって自分を知ってもらえているようで嬉しかった。

もう少し踏み込んだ話を、親の話をしようとした時に、グローリアは突然話を切り出す。

「そういえば、ホープくんはポケモンの捕まえ方知ってる？」

「え、知ってはいるけどやったことはないぞ」

「じゃあお姉さんと捕まえよっか!」

そう言っつてグローリアは草むらの中に入り込んでいく。ホープはそれに追従し、グローリアの所までゆく。目の前には細長い頭を持つむしタイプポケモン、サッチムシがいた。

「ホープくん、ヒバニーを出して」

「あ、ああ!行け!ヒバニー!」

ヒバニーは初めてのバトルで張り切っている。

「ポケモンはダメージを与えて、動きが鈍くなったらボールで捕まえるの」

「分かった!むしタイプっぽいけどヒバニーにはほのおタイプの技はないし、たいあたり!」

ヒバニーはホープの命令を受けて、走り出す。その瞬間、ヒバニーの耳の色がくすんだ灰色になり、走る勢いが増す。

ドンという衝突音と共に、サッチムシは後方に吹き飛び、動きが鈍

くなる。

「え！凄いやほのおタイプの技じゃないのに威力が上がったぞ！」

「特性、リベロね！出すわざと同じタイプになるとくせい！」

驚くホープに対して、ヒバニーはサツチムシに背を向けて誇らしげに胸を張る。それを期にしたサツチムシはせめてもと、頭の器官を震わせ奇妙な周波を放つ。

「!!ヒバニー！よける！」

ヒバニーはそれに一步遅れ、全身にその周波を浴びる。が、頭を振りかぶりヒバニーは持ち直す。

「ヒバニー！」

「大丈夫。モンスターボールを投げて」

「あ、ああ！」

ホープはカバンからガサガサと物を落としながらモンスターボールを探り当て、父親のフォームに習った力を込める投げ方でサツチムシに投げつける。ボールは放物線を描き、サツチムシにあたる。ボールから光線が放たれ、サツチムシを包み、そのまま地面に落ちる。

今にも転けそうなフォームを見たグローリアは、言葉を失った様子で立ち尽くす。

「いけたか？」

内部でサツチムシが抵抗しているのか何回か揺れ、その後観念したのか、モンスターボールのロックがかかる。

「やった！」

ホープはサツチムシを手に入れた。喜ぶホープはサツチムシの入ったボールを見せびらかす。グローリアはハツとした様子でそれを確認し、おめでとうと称賛の言葉を伝える。

「そうだ。お祝いにこれをあげる」

グローリアはカバンから小さな袋を取り出し、ホープに手渡す。

「これは？」

「ダイヤモンドアメ。ダイヤモンドするときにより大きく強くなる能力を引き出すアメ」

「こんなに良いのか!？」

グローリアから渡されたダイヤモンドは10個程度あり、潜在能力を引き出すといういかにも貴重な道具を初対面に渡す豪胆さに驚いた。

「私にはあんまり必要ないから」

そう言つてグローリアはホープが散らかした道具を拾い、ホープに手渡していく。その後、ヒバニーに対しても傷薬で周波の直撃した部位を丁寧に撫でながら振りかけ、オレンの実を渡す。ヒバニーは初めての家族以外の人間であるにもかかわらず、リラックスしており、ホープにも見せない表情を見せた。

その様子が我が子を撫でるような愛おしさがあり、ホープはそれに釘付けにされる。

「グローリアって、お姉さんっていうよりお母さんっていう感じだな！」

ピクリとグローリアは手を止め、首をゆっくりと動かしながら、少し震える。そして何かを悟らせないように笑い。

「女の子に向かってお母さんみたいなんて失礼よ」

眼鏡の反射で見えない目でホープを嗜めた。

一悶着あったものの、ホープたちはハロンタウンの入り口に着く。

「それじゃあ私はここで」

「うん!...また会えるといいな!」

「...そうだね」

グローリアは足早にさり、ホープはそれを見送る。自宅まで追いかけるというのは流石に遠慮がないと思うのと、サッチムシの調子で他のポケモンを捕まえようと、ホープはまどろみのもりに急いだ。

一方、グローリアは吐き気に苛まれていた。

初恋の人物に似ていた顔立ちから繰り出される所作はかつての彼の生写しのように、変わらない姿の自分が再び青春を繰り返したようにも感じたが、それ以上に、彼ではない目が自分を射抜き、無遠慮な「お母さんみたい」という単語と瞳が彼ではないことと、自分が辿り着けなかった空想を刺激し、ふらついたまま実家へと戻る。

変装用の眼鏡を取り、グローリアからユウリに戻る。

チャンピオン、ユウリの実家。未成年で就任したことと、リーグの厚い支援のおかげでマスコミにはバレていないユウリの実母が住む家である。

20年の時を経て、より自然と調和した姿はまるで住み処を隠すようになっていた。

「ただいま」

「おかえり、ユウリ」

若干年老いた母親が出迎える。食欲がないと伝え、自室のベッドに倒れ込む。チャンピオン防衛のたびに送られるトロフィーは乱雑に置かれ、ガラルに貢献した表彰はプリントの山のようにひとまとめにされている。母親に自身の心労を悟らせないためにファイリングはしてるものの、大凡表彰を保管する方法ではない。

チャンピオンになってからちよくちよく自宅に戻ってはいるが、まともなベッドに寝転んだのは久々だ。

サイドテーブルには、写真が立てかけられており、在りし日のユウリとホップのツーショットがある。それ以外には思い出を残すものはない。

「ごめんね。ホップ」

そう一言事切れるように呟くと、深い眠りについた。

・まどろみのもり

深くくらい、倒れた木や木に巻き付いたツタと湿った地面に苔むした岩、そのどれもがまどろみというのにふさわしい雰囲気醸し出していた。

浅く霧がかかった森の中はどこか恐ろしく、朝では目覚まし代わりとなっていたココガラの鳴き声も、ゴーストタイプを帯びているようだ。ホップは感じる。

しかし、以前のまどろみの森とは違い、20年間でザシアン・ザマゼンダの伝承が精査された結果、最奥にあるとある台座までのルートは整備されており、道を踏み外さなければ、ヒトの道として、ポケモンは寄ってこなかった。

ホップは、ポケモンを捕まえるという当初の目的はサッチムシの確

保によって達成されていたため、ヒバニーをボールから出し、探検をメインにしていた。

「なんか強そうなポケモンがいっぱいいるな！」

というのも、今のホープではまどろみのもりでバトルすることは出来ないと悟っているからだ。

横目で見ると明らかに自分では手がつけられないような顔つきのガラルマタドガスやムシャーナがおり、ホップから教えられた「実力に合わないポケモンはとても危ない」という言いつけを守っていた。

ポケモンとヒトは基本的に共存の状態であり、どちらかが緊急事態か攻撃しない限り静観を貫くのがほとんどだ。争いは本能的に自分を守るためにあるというのがポケモンの行動原理であり、一部の凶暴なポケモンを除けば友好的だ。

ホープはヒバニーと共に、最奥までの一本道を歩く。

最深部は3方を囲む湖のようになっており、中心には大きな石のモニュメントが置かれている。年月が経ち、劣化はしているが、歴史的価値から修繕が繰り返され、20年前よりも綺麗になっている。当初は苔むしていたが、地場産業の発展のために観光資源として活用されている痕跡が見えた。

そのモニュメントの中の石碑の前に白衣とレディーススーツを組み合わせたような女性が立っていた。女性はホープが来たことを察すると向き直る。そして顔を確認するとその冷静そうな目を大きく見開いて、今までとは全く違う印象になる。

「あなたは…」

ホープはその変化に驚き、目を擦ると先ほどまでの冷静そうないかにもキャリアアウーマンという見た目の美しさと経験の見える見た目に戻る。

「私はとある研究をしているのですが、その過程でとある疑問が浮かびました。一般の方の意見を聞きたいのですが、宜しいですか？」

唐突に話しかけられたホープはドギマギするが、その調子の変わらない話し方に冷静さを取り戻す。

「子供の意見でもいいならいいぞ！けどまだジムチャレンジはしてな

いからポケモンのことについてはあんまり分かんないぞ！」

「大丈夫です。ちよつとしたクイズのようなものですから」

女性は一言おくと、息を吸い、ホープに語りかける。

「では…」

あなたがやり直したい事があったとして…

例えば、お母さんのお気に入りのお皿を昨日割ったとして

今日のおやつが無くなる代わりに、

割らなかつたことにできるとしたら、

あなたは

おやつを我慢しますか？」

「…」

「…」

ホープは手を組み顎に手を当てて考える。そして快活な笑いを出しながら答えを出す。

「割つたものは仕方ないからちやんと謝っておやつを食べるぞ！」

「…」

女性は少し驚いたような様子でたたずむと、元の表情に戻り、ホープに近づく。

「これはお礼です」

渡されたのは隕石のような紫色の石とリーグカードで、父親のホップが自室に飾っていたねがいぼしと呼ばれるものと同じものであった。

ホープは、ねがいぼしとオリーブのリーグカードを手に入れた。

「最近の子供に声をかければ不審者と言われますから、名刺がわりに。」

ジムチャレンジが近いですし、あなたがジムチャレンジするならばリーグカードを集めて思い出にするのもいいかもしれませんね」

オリーブはヒールの高い靴でなれたようにまどろみのもりへ戻る。ホープはその質問が何に利用できるのか考えながら、最深部のモニュメントを見る。ふと、ポケモンの遠吠えのような声を聞き、その方向を見る。

そこには4足歩行の、ウインディともガラルギャロップとも言えない青色のポケモンがうつすらと見えた気がした。

開会式

「サッチムシー・むしのていこうー！」

サッチムシは目の前のホシガリスに対して周波を当てる。ホシガリスは目を回して倒れ込み、しばらくすると何処かに逃げていった。

2番道路、湖の映える美しい空間と、かつてのマグノリア博士の邸宅をはじめとした往来の住民の家があった。

現在のマグノリア博士の邸宅は彼女の意向で、ホップとソニアの第二の研究所として稼働している。

「よくやったぞー！サッチムシ」

その正面の草むらでホープはサッチムシを鍛えていた。

サッチムシは嬉しそうに頭を振りホープに感情を伝える。サッチムシを捕まえたことに関して、グロリアとの出会いも、何処か気恥ずかしくて言えなかった。ただ、経緯については先輩のトレーナーが親切に付き合ってくれたとだけ伝えた。

ねがいぼしについては言い訳することもできず、まどろみのもりに行ったことと、オリーブからねがいぼしをもらったことを正直に話すと、ホップから怒られたが、納得してもらい、アクセサリーにした。

義務教育を10歳で終える世界では、頭の回転も速くなると同時に感情の成熟も早い。特に、ジムチャレンジを終えると途中で諦めても経験を積み、すぐに研究者の卵となることもできる。ホップがその際たる例であり、漠然とした目に見える目標から自分の考えた目標になる人間も多い。

ホープも同じように、20年間無敗のチャンピオンというゲームのラスボスのような目標が見えているため、他の道が分からない少年にとってはそれしか見えなかった。

「そろそろ行くか」

開会式は朝方のため、前日からエンジンシティに泊まり込むのが、一般的なジムチャレンジャーの行動で、老舗のポケモンリーグ提携企業のスボミーインから無料で部屋が提供されている。

研究所に入り、両親に出発を伝える。当初は駅まで送ると言ってい

だが、駅よりも研究所の方が良いというホープの意思と伝説のポケモン故にあまり人前に出せないザマゼンタとの挨拶もかねてということとでこちらと決まった。

「気をつけていってくるんだぞ」

「日差しが強いと目が焼けちゃうからこれを渡しとくね」

ホップから頭を強く撫でられ、ソニアからはソニアのものとよく似たサングラスを渡される。

ザマゼンタは、ホープの服を少し嗅ぎ、一鳴きして挨拶がわりとした。

「じゃあいってくるー」

ホープはソニアのように頭にサングラスをかけて、外に出る。近くの駅という、見慣れた風景だが、いつもよりも明るく見えた。

ホープを送り出したホップたちは昨日の出来事について、話し合っていた。

「オリーブさん、まだブラックナイトのことを、ローズ委員長を止められなかったことを悔やんでるのかしら」

ブラックナイト、人工的にローズが発生させたガラル地方のポケモンをダイマックスさせ、結果的に1000年後のエネルギー資源の枯渇を無くそうとしたものである。結局、その鍵を握るポケモンを現チャンピオンのユウリとホップたちが撃退し、ユウリが管理することで、再発の機会はなくなった。

「…ローズ委員長はガラルの未来のために今を犠牲にしようとした。それは変わらないし、変えられない。けど、あの注意喚起があったからこそ今があるんだ。彼女の中で踏ん切りをつけるのを待つしかない」

「そうね」

ブラックナイトの以後、主導していたローズの思惑について、様々なメディアが大々的に取り上げた。当初、日程がジムチャレンジの期間と被り、ジムを封鎖してジムリーダーたちが暴走するポケモンに対応しながら発生したエネルギーを活用するという目論見であったこと、ローズ委員長が先を見据えすぎて暴走した結果として処理され

た。無論その中の実行犯にはオリーブもいたとされたが、マクロコスモス自体がローズのワンマン経営とローズの根回しによって、世間にマクロコスモスとポケモンリーグの腐敗ではなく、ローズの狂気というだけで留まった。

しかし、それでもローズに心酔していたオリーブにとって、自分だけが日の光を浴びる生活は耐え難く、細身にもかかわらず炭鉱で無償の労働を行ったり、各方面への謝罪へ出向いたことは、関係者の記憶に新しい。

しかし、ヒトの技術の進化による資源の消費も同時に浮き彫りになり、ローズ委員長の1000年後の枯渇がこの消費を継続すればの考えで計算されていたことと発表され、再計算されるなど、エネルギー消費についても考えられるようになった。

その結果、無限の未来というスローガンを掲げたムゲン団が発足したという噂もある。

「さて、俺たちはホープに過干渉せず、研究するか」

「あら、干渉する暇もないわよ?」

「え、そんなの聞いてないぞ」

「言っていないもの、晴れやかな気持ちで送り出せてよかったでしょ」

「やっぱりソニアには敵わないぞ」

頭をかきながら白衣を整え、2人は研究所に戻る。ザマゼンタはエンジンシティとまどろみのもりの方向をそれぞれ見ると、一つ大きな遠吠えをして、研究所に戻った。

・エンジンシティ

翌日、気品と大きな歯車が目立つ街、エンジンシティはジムチャレンジの開会式の日とあり、非常に賑わっていた。ローズタワーにつぐ高さの時計塔が建設された以外には、街の様子は飲食店や建築物の一部が変わった以外で、大きな変化はない。物事の潮流が大量生産ではなく、今あるものをより美しく直すに変換したためだ。過去をもってして未来を切り開く。それが今のガラルの風潮であり、その象徴がこのエンジンシティだ。

「チャンピオン、そろそろ開会式です」

オリーブがエンジンシテイのとある場所から景色を眺めるユウリに声をかける。炭鉱で奉仕活動している最中に出会った希望を持っていた頃の少女とは違い、今では何処か遠くを見ており、痛々しい。それが年齢相応の見え目であればまだ救いはあったが、未だに少女の姿をしているのは、彼女が過去に囚われているように見えて悲惨であった。

「今行く」

かなり精神的なストレスが溜まっているのか、機械じみた単語選びに、かつてのローズが何故か重なった。行動や単語の裏に様々な思惑があり、その全てがいつでも実行できるといふスイッチをなぞり続ける狂気である。

ローズにとって、1000年後のガラルのエネルギー枯渇が明日のことのように感じられたように、ユウリの過去の想起が早朝に起きたように踏ん切りがつかないのだ。

それでも優しい言葉をかければ何か崩壊してしまうと察しているオリーブは、彼女に対してビジネスライクに徹した。

「チャンピオンらしい所作をなさってください。どこで誰が見ているかわかりませんので」

「ちよつとは息抜きさせてよお、オリーブさん。開会式の後も一番道路に行つて自称ムゲン団こらしめなきやならないのに」

その苦笑に、ローズが逮捕される直前に交わしたいつも通りのコミュニケーションを思い出し、眉毛が動く。

ユウリが退出し、1人部屋に残ったオリーブはデコをガラス窓に当たてて項垂れる。

「オリーブ、本当にダメなこ」

ユウリは開会式の会場の控え室に立つ。かつてはローズ委員長が行っていた委員長による開会とジムリーダーたちの紹介、しかしブラックナイト以降、委員長に権力を渡すすぎたとして、現在の委員長にある権限の一部がガラルの英雄であるチャンピオン、ユウリに移動した。

そのため、チャンピオンに合わせた開会式が行われるようになった

のだが、その影響により、民間のアナウンサーが紹介を務めることとなった。

壮年のアナウンサーの覇気を持った声と流れる軽快な音楽がユウリの心を刺激する。

「ポケットモンスターの世界へようこそ！皆様、大変お待たせいたしました！」

チャンピオンリーグに参加できる人間はかつてのブラックナイトの影響により、ジムチャレンジの推薦状を貰おうとする人間が極端に減り、ユウリがチャンピオンになった2年間はジムリーダーのみのチャンピオンリーグになった。

その影響で減った観客数とは違い、大きな歓声が控え室まで響いている。

「年に一度のガラル地方の祭典、ジムチャレンジが開催されます！」

そのマンネリに対抗する苦肉の策として、過去にジムバッジを8つ手に入れていればチャンピオンリーグに出場出来るというものとして、変則的な取り組みも行った。

その結果、ポケモンリーグは存続し、メディアのロトムカメラが特設された画面と、スタジアムに集まったチャレンジャーたちを映す。

「バッジを8個手に入れたすごいトレーナーがチャンピオンが鎮座する、チャンピオンカップに出場できます！」

そして現在、かつてのダンデ全盛期にも劣らない観客数とチャレンジャー数を確保し、元のルールに戻りつつある。

映写機により3Dのガラル地方の地図が空中に浮かぶ。

しかし、その弊害として、チャンピオンユウリの神格化により、ジムリーダーの実力順のジムチャレンジから、かつてチャンピオンが通った道乗り順のトライアスロン形式となったのだ。

「殿堂の道を辿り！ガラルのチャンピオンとなる希望の星たちに対するは！それを見定めるジムリーダーたちの登場です！」

それぞれのジムが配置されている場所が点灯し、まるで星座のようにガラルの地図を照らすとともにジムリーダーが入場する。

「ジャイアントファーマー！くさタイプの専門家 ヤロー！」

優しげな顔つきであるが歴年の日焼けと農作業により隆起した筋肉が強調された壮年の男性が大きく手を振る。

「アメイジンググウェブ！みずタイプの女王 ルリナ！」

美しさに磨きがかかり、年齢が分からないほどのモデル体型の女性が髪をたなびかせる。

「燃え続ける炎！ほのおとともにある男カブ！」

年齢に対して一切の腰の曲がりなく行進する男

「ミステリアスボーイ！ゴーストタイプのオニオン！」

かつての弱々しさは無く、仮面の内から闘志の意思が見える青年

「ファンタステイック アクター！フェアリー使いのビート！」

自信満々でしなやかな動きを見せる青年

「ハードロック！岩タイプの使い手！マクワ！」

髭を蓄えた巨岩の如き男がスマートなアピールを行う。

「パンクアンドクール！あくタイプのヒロイン、マリイ」

髪を伸ばし、成長した女性が柔らかい表情を見せる。

「ドラゴンゲートキーパー！」

トップジムリーダーキバナ！」

かつて自撮りをしていた人懐っこい男はその鳴りを潜め、鋭い瞳と闘志を放つ。

その様子を見て、ユウリは歳を重ねることにその口上に辟易していた。専門家、プロフェッショナル、女王、どれも聞こえはいいが、平均年齢が高くなった上に、顔ぶれに変化がない。若い芽が育たなくなった土壌で古い木が鎮座しているように見えて、気分が重くなつた。

（ホップがチャンピオンなら…）

ありもしない空想が頭を過ぎる。若くして研究者の道を目指せたホップならばもつとうまい運営ができるかもしれない。

前チャンピオンの弟として兄を倒すというドラマがあつたとしたらよりジムリーダーを目指す人間が増えたかもしれない。

ザマゼンタかバイウールーかどちらかのポーズをダンデのように作り、より多くの協賛企業をつないでいたかもしれない。

その度に、ファイナルトーナメントで自分に負けたホップが、チャンピオンへの道の未練を消したような顔を浮かべる様子が想起される。

「ウツ…」

口から酸っぱいものがこみ上げる。すぐさまヤドランを出し、自身にいやしのはどうを当てさせる。

「ヤドラン、ごめんね」

いやしのはどうのために呼び出されるヤドランに謝り、控え室から出る。

「そして、それらを待ち受けるのは無敗の女王！ユウリだー！ー！」
チャンピオンとして、ふさわしい表情を作り、控え室から会場へ出る。

会場にいるホープは歓声が一際大きく響くのがわかった。大歓声の中表れたチャンピオンの気迫は生で見ると凄まじいものであった。ホープには、まるでキョダイマックスしたポケモンが目の前にいるような感覚が押し寄せる。

異常に神格化された英雄とメディアが言っていたこともあったが、そんなことはない。ホープは肌で感じる。目つきが違う。常に重圧を跳ね返したような背筋は、華奢であるにもかかわらず、剣と盾をあしらえたユニフォームに負けない生命力があった。マクロコスモスだけのスポンサーロゴの入った白いマントが神聖さを引き立たせた。
「あれが、チャンピオン」

開会式の熱とチャンピオンのオーラにホープはただ圧倒されることと、その情景が記憶に深く根付いた。開会式が終わると、チャレンジャーたちは特設された大型のアーマーガータクシーに乗り、ハロンタウンに向かう。これは、エンジンシティからワイルドエリアを一望し、ガラル地方の広大さをチャレンジャーたちに見せるためでもあり、遊覧船のように空を飛ぶ中で、チャレンジャー同士の交流を図り、ジムチャレンジ後もコネクションを作らせるためだ。

ホープは未だに開会式の熱に浮かされていた。ポケモンの気迫は

ザマゼンタで知っている。しかし、ヒトがあれほどの気迫を出せるとは知らなかった。加えて、どこかで聞いたその声も合わせて呆然とするしかなかった。

・一番道路

ハロンタウンについたチャレンジャーたちは各々の方法でヤローのもとへ向かう。既にポケモンを持っているものは鍛えるために、親から借りたポケモンしか持っていないものは捕獲するために一番道路へ向かう。兎にも角にも一番道路なのだ。

一見、野生のポケモンを大量のトレーナーが襲うような凶式になるが、実際はそうでは無く、大量に配置された協賛企業の従業員や、住民が気兼ねなくポケモンバトルするために野生のポケモンの乱獲は起こらず、むしろヤローでつまづくトレーナーを少なくするのが目的である。

ジムチャレンジ期間内に8つのバッジをゲットするためガラル地方を回ると言ってもアーマーガアタクシーはチャレンジャーは無料で使えるため、さして移動に制限はない。

事実、ホープの周りのトレーナーはロトム自転車で走ったり、ガラルポニータに乗って駆け抜けたリ、アーマーガアタクシーを使っているものも見かける。

ホープは、昔ながらの徒歩で向かうことにした。しばらく歩くと、老人のショップがあり、繁盛している様子で、デリバードが目を通して老人の商品を運んでいる。老人の言っていた孫は見当たらないが、その老人の息子夫婦らしき2人が溢れんばかりのジムチャレンジャー達のどうぐ購入を手伝っている。

ブラッシータウンの方が近くなった頃、1人の少女が黒い服の男女の前で泣いている。

「お願いー私のロトム返してー!」

見ると開会式で見かけた1人であった。その前にいるものたちは黒いロング丈に手のようなものが何かを掴むマーク、ムゲン団のマー

クが書かれている。

「うるせえ！負けたんならピーピーいな！」

「こつちもちゃんとして10倍の金払うって言ってただろ！」

「何やってるんだお前ら！」

ホープが2人の前に駆け寄る。

「あんたには関係ないな！」

「俺たちは無限の未来を作るムゲン団、こいつ、ジムチャレンジする前に服買つて金がないから、やさしーオレたちがムゲンのカネをあげようとバトルしてたわけ！」

「けど、ムゲンのカネをフツのバトルで出せるほどお人好しじゃねーから負けたらもってるポケモン渡すって言ったわけ」

自身のポケモンを賭けの対象にすることはこの世界では褒められた行為ではない。しかし、コイキングを500円で売り捌くことが全く違法ではないという見解が出ており、双方が合意すればポケモンをポケモンバトルの報酬にすることも可能である。目の前の少女は、見るからに真新しい服を着ており、それを土ぼこりで汚している。ようは、初心者狩りにあっただけである。

「な！そんなこと言ったのか！」

「だって、お父さんのロトムなら負けなと思うって…でも全然いうこと聞かなくて…」

だがポケモンにはそんなことは関係ない。気に入らない主人・力のない主人に従うような機械的なものではなく、主人と認めて初めて従うのがポケモンである。こうなれば、どちらが悪いとは言えない。相手を舐めて誘惑に負けた少女にも非があるし、明らかかな初心者狩りにも非がある。

周りの誰もが助けなかったのは、少女が完全な被害者ではないからだ。

ホープは意を決して、2人組に向かう。

「…俺が負けたら10倍の金を出す！だから俺が勝ったら返してあげてくれ！」

「やさしー！でも10倍の金だせんのか？6000円だぞ！出せない

ハツタリに付き合うほど優しくないからな！」

「っ…」

ホープの手元には丁度お小遣いとしてもらった3000円しかない。しかし、ポケモンを賭けるのは、チャンピオンからもらったヒバニーとグローリアアとの思い出もあるサッチムシというホープにとっては大きすぎるものであった。

「じゃあ私も混じっていいですか？」

不意に後ろから声をかけられる。それは一度あった女性、グローリアであった。

「グローリア?!なんでここに!」

「私はハロンタウン出身よ。一番道路にいてもおかしくないでしょ？」

「なんだ?知り合いか?」

「なんでもいや!金出せるんならダブルバトルでもいいぜ!」

「ええ。お金はバトルで溜まっていますから。ホープ、一緒に戦って?」

「え、ああ!いいぞ!その子のロトム返してもらおう!」

4人がモンスターボールを構え、バトルが始まる。ムゲン団のしたっぱ達は女が頭の黄色く染まったガラルヤドン、男がタマタマを繰り出した。

「いけ!ヒバニー!」

「行って、アツプリュー!」

グローリアは、カジッチュの進化系であるリングゴが変形して生まれたいようなドラゴンを繰り出す。

「アツプリュー!ヤドンにおどろかす!」

「ヒバニー!タマタマにひのこ!」

アツプリューが目にも止まらぬスピードでヤドンの目の前に近づき大声で鳴く。ヤドンはその音の反響に目を回し、戦闘不能となる。ヒバニーは自身の発火性の高い毛皮を擦り、炎を生み出しタマタマに振りかける。くさタイプであるタマタマは殻が燃え、悶えながら戦闘不能になる。

「うっそだろおい」

「やさしくな〜い」

ムゲン団のしたっぱたちは素早くボールにポケモンを回収すると、ばつが悪そうにロトムの入ったボールを少女に返し、ファイトマネーである600円をスマホロトムからホープたちに送金する。

「これでいいだろ」

「じゃ、そういうわけで!」

ムゲン団達はそれが終わるとヨロイジマの某ヤドンのような速さで高速で逃げ出す。

「あ、待て!」

「…」

ホープは追いかけてしようとするが、あまりにも早いため追いかけることはできず、グローリアはそのまま静観する。

少女はロトムをボールから取り出し、安堵したのか何度もごめんねと謝っている。そんな少女にグローリアは話しかける。

「…負けたらそんなことになるかと分かってたのに、何で勝負を受けたの…」

「だって…」

「まあまあまあ、グローリア、この子も反省してるんだしさ。取り返せたんだし良かったじゃん!」

「…そうね。取り返せば良いもんね」

ホープの言葉に少し反応し、小さくつぶやくと少女に言いすぎたと詫び、少女も気をつけると行ってロトムと一緒にかけていく。

「…ごめんなさい。彼女だって辛かったのに」

「いや、グローリアがポケモンを大事にしてるって伝わったぞ!」

落ち込むグローリアにホープは取り繕い、グローリアの反応を伺う。

「そう、嬉しい」

儂く笑うグローリアにホープはまた心臓が強く跳ねた気がした。

「な、なあ、グローリアはここから何処かに行くのか?」

「ちよつと駅…ブラッシータウンまで」

「じゃ、じゃあ一緒に行かないか?さっきみたいなのがいるかもしれ

ないし」

グローリアは少し考えたのち、了承する。そこからホープはグローリアの歩幅に合わせて歩いていく。ブラッシータウンまでの道のりは、かつては獣道であったが、舗装され、ヒトの通る道は石畳、離れて草むらに入る方向にはきちんと立て札と柵が取り付けられており、以前よりも人と他の棲み分けがなされていた。

暫く歩いていると、ホープはグローリアの繰り出したアップリューについて、とあることを思い出す。

「な、なあ。グローリアのアップリューは、だ、誰かからもらったのか？」

「え？私が捕まえたポケモンだけど？」

「そ、そうか。なら、いいんだ」

アップリューの進化前であるカジツチュは異性に告白するとき渡すと恋が叶うという噂が父親の時代からあったという。いわゆる告白のサインであり、希少なドラゴンタイプで可愛い見た目のガジツチュを渡すという、相手のことを思っているという意味表示から尾鰭がつき、結果的に噂となっている。

グローリアは何かを察したように意地の悪そうな顔をしてグローリアはホープの顔を覗き込む。

「もしかしてカジツチュの恋の噂のこと？」

「い、いや！そんなことはないぞ！」

ホープは言われたことが的中したことに恥ずかしさのあまり手で顔を隠そうとする。丁度鼻から上が隠れるようになった時、腕の隙間から見えたグローリアの顔から生気が抜けたような気がした。

しかし、次の瞬間、素の表情に戻り明るくごめんと繰り返すグローリアにホープは安堵し、ブラッシータウンまでの道中を過ごした。

ブラッシータウン

グローリアとホープがブラッシータウンに着いたのは夕方になってからだった。途中でグローリアにジムチャレンジ中というのを伝えるとバトルのために駐在していたいろんなトレーナーに片っ端からホープとバトルしてほしいと頼んだのだ。

そこからはヒバニーとサッチムシを交互にバトルさせ、グローリアが回復していった。時折寂しそうな顔をするグローリアだったが、バトルの時はド拙いバトルであつても目をギラつかせて見ている。

それを確認するたびに恥ずかしそうにして隠す様子が可愛らしかったため、ホープも満更でもなかったし、元々好戦的なヒバニーや、褒められることが好きなサッチムシはバトルしていった。

道草を食つてはいたが、10歳にしては小金持ち程度になり、鍛えられた二匹は昨日よりもたくましい。

ブラッシータウンもまた、ジムチャレンジャーが最初に辿る街とあつて、駅前には拡張されており、出店も並んでいる。

「私は電車に乗るからここで」

「ああーそれじゃあこれ渡しとくぞー!」

グローリアに、ホープがポケットからリーグカードを手渡す。はにかんだ正面の構図という、いかにもジムチャレンジャーという写真には39の背番号が書かれていた。

「ありがとう」

「グローリアのリーグカードはないのか?」

「ごめんね、今日は持ってないの」

「そうか、じゃあまたな!」

「うん」

そう言い残してグローリアは駅の方向に歩いていった。ホープはその足のまま自宅に向かう。

「というわけでムゲン団っていうやつがいたんだ」

「なるほど、これはリーグにも情報として挙げておく必要があるな」

ホープがブラッシータウンに帰ってきたとあつて、ホップとソニア

は1日ぶりの我が子を出迎え、夕食をとっていた。ホープがキャンプをする時に備えてと、家族全員で作ったカレーだ。

ザマゼンダは基本的に気ままに過ごしているため、夕食にはおらず、2番道路の研究所にいるようで、家族3人の団欒となった。

「けどムゲン団ってそんなことする団体かしら」

「おそらくムゲン団を語ったチンピラってこともありえるな。ムゲン団は基本的に福祉活動とエネルギー研究ってくらいだからな」

「へえ。じゃあ何でわざわざムゲン団って名乗るんだ？」

「うーん。ムゲン団の支援Tシャツがホープが言ってた2人の服装と同じだから、マクロコスモスとかジムトレーナーと名乗るよりは楽なのかもな」

ホップは頭を傾け、腕を組みカレーのスプーンをペンのように揺らしながら考え込む。ソニアはカレーが付くと一喝し、再び食卓に戻る。

ヒバニー達も初めて食べるカレーの味に舌鼓を打っていた。

一方、エンジンシティのジムでは、ヤロー、ルリナ、カブ、そしてユウリが会議室で話し合っていた。

「1番道路でムゲン団が…」

「マクロコスモスの子会社に調べさせたところ、2人組はムゲン団とは関係なく、単なる支援者Tシャツを買って成り済ましていただけのようです」

「迷惑な連中ね」

「しかし、同意の上での報酬設定では僕たちもあまり口が出せないね」「まあ無難なのはバトルでは基本のファイトマネーにしましょうという喚起ぐらいじゃろな」

支援者Tシャツを正規に購入している以上、ムゲン団の支援者であり、ムゲン団の団員としても成立するのがムゲン団のスタンスであるため、ファイトマネーも財源の一つであるジムリーダーたちもファイトマネーはかくあるべきと言えない立場である。

とくに、ヤローやルリナは商談としてバトルで、どれだけ食いつければ割引するということも往々としてあるため、制限を設けることは

できなかった。

落とし所を早々に見つけた面々に対して、ユウリは問いかける。

「ほかに何か問題は起きてはいませんか？」

「エンジンシティにはまだチャレンジャーすら来てないから問題はないね」

「同じく、ただムゲン団で言えば福祉施設でワイルドエリアでチャレンジャーが入手したものを換金するサービスをしてるわ」

「ターフタウンじゃ2，3人血気あるのと常連がきとるの。今のところ申請した通過率を維持ですな」

「わかりました。引き続きよろしくお願いします」

そう言ってユウリは立ち上がり、会議室を後にしようとする。

「ねえチャンピオン、今から私たちが食事に行くのだけれど、一緒にかがかしら」

「…では」一緒に緒させて頂きます。待つてる家族もいませんので」

ユウリはカバンの中にあつたゼリー飲料を飲む機会を失った。

「ふうー。満腹だぞー」

ホープは何杯ものカレーを食べ、腹を膨らませている。その様子をホップはテレビを見ながら苦笑している。ソニアは入浴しており、男2人並んでいる状態だ。

「どうだ、チャレンジャーで可愛い子はいたのか？」

「え、そそそそんなことはないぞー」

「分かりやすいな。どんな子だ？言っておいて損はないぞー。初恋大変だからな？」

「初恋って…。うん、まあそうだよな。別に父さんに知られてももうブラッシータウンにはいないし、言うよ」

子供の成長は、ジムチャレンジにありと言った様子でホップはホープに尋ねる。ヒバニーやサッチムシの様子からバトルによる経験はあつたが、内面での成長はわからないためだ。

かつてのビートのように実力はあつても精神が捻くれたまま暴走したように、力は中途半端にある子供大人になって欲しくない親心が

あつた。

「…茶髪が肩まであつて、茶色の目で、あとバトルが好き」

「…」

ホープの繰り出す言葉にホップは一瞬啞然とするが、すぐに戻り、笑い出す。

「なんだよ父さん」

「いや、まるで俺の幼馴染みみたいでな」

「…幼馴染み？」

「ああ、すごく強くて、甘いカレーが好きで、茶髪で茶色の目をしたバトルが好きなきさ」

「えー、父さんと同じ趣味してたのか俺って」

「いや、俺はその子のことをただのライバルだと思つてたからな！」

「ふーん、その人は今どうしてんの？」

「聞いて驚くなよ！なんと20年もガラルのチャンピオンをしている！」

「マジで！つてことはチャンピオンのユウリ！信じられねえ！あんなすげえ気迫の人と?!」

「ははは、ユウリはポケモンが絡むと凄い気迫だからな！」

たわいない雑談をしていると、テレビが生放送に切り替わる。レポーターがジムチャレンジ初日のガラルの様子を映しているようだった。夜のジムをバックにアナウンサーが近況を説明している。

『本日のジムチャレンジですが、ターフタウンのヤローのジムが5人挑んだだけで他は誰も来ていないということです。午前中が開会式にあり、ハロンタウンからの出発が14時とあつてことか例年通りの滑り出しとなっています』

画面が切り替わり、バウタウン、エンジンシティと切り替わる。

『エンジンシティですが、ジムチャレンジキャンペーンということで様々な飲食店が特別メニューを出して…あ！チャンピオンとジムリーダー達です！会議でしょうか？皆さん私服です！取材を試みたいと思います！』

「カブさんも老けたなあ」

苦笑しながらテレビを見るホップに対して、ホープの心情は揺らいでいた。

私服のチャンピオンは眼鏡こそかけていないもののあの時に感じた覇気がなくなると、今日駅で別れた人物に非常に似ていた。

(グローリア：？)

『皆さんでお食事ですか?』

『ええ、初日の成功を祝って。たまたま会議でしたので4人で行くのかと』

『例年カブジムリーダーの場所で5割が脱落するといわれてますがどう思われますか?』

『ぼくのところは、くさタイプ、みずタイプ、そしてほのおタイプという三棘みの最後となるので対策が難しい部分もありますので、じつくり腰を据えて勝機を狙えば突破は難しいものではないですね』

画面では、農家らしい耐久力のありそうな服を着たヤロー、モデルらしく最先端のデザインのルリナ、スポーツウエアを着て、歴戦の監督にも見えるカブ、そして新作の服に身を包んだユウリがいた。

『一方で突破率の高いターフタウンですが、今年は如何ですか?』

『いやー、ははは。カブさんの言う通り私も腰を据えて勝機を狙わんとですね』

受けを狙って飄々とするヤローに対して愛想笑いを浮かべるユウリの顔が、グローリアと似通っているどころか、ほぼ同じであり、メイクの差はあれど、気迫のないチャンピオンは、20年間防衛し続けた勝利の女王ではなく、無垢な少女にも見えた。

『チャンピオン、今年のチャレンジャーで期待される方はおられますか?』

その単語にピクリとする。ホップはそれを見て、期待しているのかと、ニヤリと笑みを浮かべる。一方でホープはその声に集中していた。

お忍びでチャレンジャーを見ていたのなら、それでいい。20年もチャンピオンをしていたら、英雄ならば、有名過ぎて息苦しいだろうと常々思っていたからだ。

誰にも期待していないと、それで誰の名前をあげられなくても良かったが、他人の名前を出されたくないという感情がホープにはあった。

『まだ始まったばかりですし、これから強くなられる方もいるので、秘密、ということでは』

ホープは大きいため息をつき、安堵する。ホープにとって、グロリアがユウリであることも、父親の幼馴染みであることも。

・なぞのばしよ

広い研究室では、ねがいぼしやねがいのかたまりが研究員の手によっていじられ、巨大なパソコンの前では複数の研究者によって計算がなされている。その場所を一望できる男女が話し合っている。

「ムゲン団の各分団も例のものたちを集め始めましたか」

「ええ。目標数は膨大ですが、副次的なヨロイジマ分団でのダイミツ、ダイキノコ採取は継続中です。」

また、メインとなるダイヤモンドクスアメは総帥により目標数を達成、ねがいぼしについては本部と各所と連携しています。また、試料として可能性のあるけいけんアメについては総帥により目標数5割を獲得済、キョダイヤモンドクスアメ研究用の個体提供については、天然ではラプラス、セキタンザン、カメックス、ストリンダー、ジェラルドン、ダイヤモンドにより引き出した個体はインテレオン、ゴリランダー、リザードン、ウーラオスが提供されています。ただしいずれもトレーナーのものなのでキズ物にせずとのこと」

「注文が多いですねえ。しかしながら今も大事にしなければ、未来は明るくありませんからね」

「…おっしやる通りかと」

「あなたも物好きですねえ。私が捕まった過去を変えたいなどと、獄中の生活など炭鉱の蝟部屋と比べたら小説が何本でも書けるほど快適でしたよ。それにダイエツトもできました」

引き締まった体を叩き、初老の男は笑みを浮かべる。

「それで宜しいならば私は…」

女性は何も言わない。

「どうです？全てが終わったら一緒にアローラでバカンスでも」

「それはパワハラです。公私の区別はつけてください」

「おやおやこれは…まだ攻略できそうにありませんね」

ターフタウン

ターフタウン編

『ターフタウンとヤロー：すり鉢状の田園が広がる風景は、見るものを圧倒する。農耕にも多種多様のポケモンを使う。ドリユウズやディグダがその例で、くさタイプのポケモンはむしろ農作物のエネルギーを吸い取るため、テツシードやナゾノクサは天敵になる場合もある。にもかかわらず、農家であるヤローがくさタイプを使うのは一重に作物とくさタイプを愛しているからに他ならない。

その愛の深い性質のせいでジムチャレンジャーを突破させてしまうと、まことしやかに言われている。

しかし彼もジムリーダーであり、チャンピオンリーグでは弱点のタイプを専門にするカブに引けを取らない点、甘えと才能が見えないチャレンジャーが脱落している点から、これ以上進むと一生のトラウマを持つかもしれないというトレーナーのみを選別している印象がある』

マクロコスモスの子会社であるマクロコスモスゴシップという出版社から出ている雑誌形式の解説付きのタウンマップに目を通しながら、ホープはターフタウンの入り口に立っていた。

街の窪んだ中心に立つジムと、地上絵、立ち並ぶ石碑は、何かの儀式の後のような印象をホープに与える。

「なんだか人が多いな」

その石碑の一つに、人だかりが出来ている。ジムチャレンジ期間といえどその年齢層は広く、地元住民も集まっていることから、何か特別なことが起きているのは間違いなかった。

ホープはそれに近づき、野次馬の一人に声をかける。

「何が起こってるんだ？」

「哀愁のネズがゲリラライブしてるんだ！」

「そうなのか!？」

哀愁のネズ、かつてのスパイクタウンのジムリーダーでありアーティストである。あくタイプの使い手とあり、見た目はパンクでダー

テイだが、蓋を開ければ純情を力強く歌うことや、バトルに真摯な点から、多くのファンを抱えていた。

20年前に引退して以降、アーティストとして活動を行っているとホップから聞いた。

目の前の痩せぎすの男は、骸骨のような印象を与えるが、観客は聞き入っている。ちらりと流れる音楽は、ロトムスマホからつながったスピーカーという音質にも関わらず、完成された音楽であると認識させる。

「…ヒトが集まり過ぎましたね。それでは今日はここまで、ネズのライヴにアンコールはないんで」

そう言っただけ大きな空き缶を置き、折り畳みの椅子に座り込む。観客たちは小銭を空き缶にいれる。人の波が過ぎた後は空き缶は一杯になっていて、溢れた小銭がその下の紙幣の重石になっているほどだ。

ネズは特に感情もなくそれを麻袋に入れる。ホープはそれに近づき、ネズの顔を見る。ダンデやホップが見せた写真とは異なり、髪はばつさりと肩口まで切られ、目はメイクかは不明だが、不健康そのものである。

かつてはユニフォームを着ていたが、いまは何故かムゲン団のTシャツを着ている。

「そのTシャツって」

「ああ、これですか。まあユニフォームも着れねえんでちようどいい感じだったか…」

顔を上げてホープの顔を見るネズはその表情を驚愕に固める。

「驚いた。ホップそっくりじゃねえですか」

「父さんを、知ってるのか？」

「…まあ、前チャンピオン弟で現チャンピオンのライバルでしたからね」

小銭を集める手は止まり、猫背のままホープの顔を見ながら話し始める。

「父さんは強かったのか？」

「まあ強かったですね。現チャンピオンがいなければチャンピオンに

なっていたかも…というくらいには」

「そんなに強かったのか！」

「なにせザマゼンタを素手で手懐けた豪傑ですからね」

ホープの知らない父の姿に驚くとともに、チャンピオンについても興味が湧いてくる。すでに観客はおらず、2人が会話しているのみとなっている。

というのも、ネズがアンコールをしないのは現役時代からであり、それ以上待とうと何をしようとパフォーマンスをしないスタイルが定着しており、それを知らないホープだけが残ったため、このような会話が成り立っている。

「さて、未来あるジムチャレンジャーに枯れたおじさんの話も長いでしょうからお暇しますよ」

「なあ、ネズさん！バトルしよう！ジムリーダーだったんならポケモン持ってるんだろー！」

「…良いですよ。ポケモンはお互い1体で」

「いくぞー！レドームシ！」

「…タチフサグマ」

お互いボールからポケモンが繰り出させる。ホープはサツチムシが進化した形である装甲を被ったような印象を受けるレドームシ、一方ネズはガラルジグザグマの最終進化系であり、発達した筋肉と鋭利なキバを、狡猾な表情で映させるタチフサグマである。

「レドームシ…むしのていこう」

「タチフサグマ、ブロッキング」

ブロッキング、タチフサグマ専用のガード技であり、ありとあらゆるものから筋肉の膨張と覇気で跳ね返す豪胆な技である。レドームシの発した周波も、それに吸収される。

しかし、一気に覇気を放つために連続で行うことは難しい。

「もう一度むしのていこうー！」

「タチフサグマ、ずつきー！」

レドームシは体を震わせて周波を全方向へ放つ。サツチムシの頃とは違い、反響させる甲殻に包まれているため、全方向へ周波を出す

ことによつて回り込まれる心配もなかった。

そのことを知っているかのようにタチフサグマは真正面からレドームシの周波を受けながらも接近し、掴みかかる。

「レドームシー」

まるでボール拾いのようなレドームシを持ち上げると、そのままひたいをのけぞらせ、その反動を最大限使つてレドームシに頭突きを当てる。

レドームシは守りに徹したタイプのポケモンであり、三段階で進化するバタフリー等と同じ蛹に相当するポケモンだ。並大抵の攻撃では倒れない。しかし、相手は元ジムリーダーにして、ジムチャレンジ用に調整されたものではなく、本来のパーティであり、甲殻が割れるかと思うほどの衝撃を受ける。

しかし、レドームシは瀕死にならず、ギリギリで持ち堪えた。レドームシはトレーナーを悲しませないように最後の力を振り絞つたのだ。

「タチフサグマの頭に集中してむしのていこうー！」

むしのていこうは、周波を出して周囲から身を守るというものだ。しかし、目の前には一つだけの脅威があり、ホープの指示もあり、集約された衝撃がタチフサグマの脳を揺さぶる。

「タチフサグマ、戻りなさい」

タチフサグマはまだ体力にはずいぶん余裕がある。しかし、ネズはいつでも反撃できる状態のタチフサグマをボールに戻し、自分から降参したのだった。

「良い一撃でしたんで私の負けということ。良い大人が若いチャレンジャー叩いて情けねえですし」

ネズはいいキズぐすりを取り出してレドームシに当てる。即効性のある薬は甲殻に浸透し、ひび割れかけた甲殻や一時的に光が鈍くなっている発光器官を修復した。

「ポケモンとの絆が深ければ深いほど、自然とこらえる、きあいだめ、アクアリングのような状態になるんです。愛情を持って育ててる証拠ですよ」

「！ありがとうございます！ネズ！」

「知ってると思います。妹のマリイは強いですよ。頑張つて下さい」
そう言つてネズはホープにリーグカードを渡し、立ち去る。

「このままジムにも行けるか？レドームシ！」

興奮抑えられぬままのホープに焚きつけられたのか、レドームシも
発光器官を警戒色に染め、賛同する。

一方、ネズはターフタウンの街並みを散策していると後ろから声を
かけられる。

「ネズさん！見つけましたよ！ねがいぼしです！」

「よくやりました。では次の街へいきましよう」

中年太りで派手なモヒカンの男が手にねがいぼしを持って近づく。
他にもゾロゾロと派手な髪型をした男女がネズの元に集う。その全
員が、ムゲン団の服を着ていた。

・ブラッシータウン

ブラッシータウンの研究所では、ホップが端末の前で文章を書いて
は消す作業を繰り返している。文面には、キョダイマックスの素養と
ダイキノコの関連である。

かつてのヨロイジマでの調査で食したダイスープは、ホップのアー
マーガアをキョダイマックスに変異できる特殊な料理だ。

その原因は未だ一切判明しておらず、そもそも話、ダイキノコを
ダイミツで代用できないと言うこと。

それに加えダイキノコの大きさ、生息発生場所について、何の縛り
もない。

ダイキノコが希少な理由はかつてヨクバリスの捕食により、激減し
たとされる。

ダイキノコの成分を効率よく摂取できるのがダイスープだとして
もヨクバリスが未だキョダイマックス個体を持たないことから、キョ
ダイマックスとはある種の選ばれたDNAを持つ種族に対して発生
するものであると結論付けられる。

しかしそれがどのポケモンが当てはまると言う確証がなく、例えば
キョダイマックスができるカビゴンとカントウ地方のカビゴンが大

スープを食した場合、同じくキョダイマックスができるようになった。

これにより、潜在能力を引き出すことよりも、DNAの一部を変化させるといふ説が濃厚になる。リージョンフォームのようにそもそもタイプが異なる進化を遂げるポケモンがあるようにポケモンの進化は早いと、DNAもその地域に合わせたDNAの選択が行われる。これを異所的種文化というが、リージョンフォームしたガラルニヤースがキョダイマックス出来ないことから前者の説が薄くなる。

キョダイマックスとなるポケモンの多くはカントウ地方から移住してきたポケモンもあり、キョダイマックスと言うのは一時的なメガ進化など地方地域においてポケモンの潜在能力が引き出される現象ではないかという説もある。

ホップは研究に必要な中でムゲンダイナと言うポケモンのムゲンダイマックスと言う単語が頭をよぎる。ムゲンダイマックスと言うのは、ムゲンダイナがブラックナイトにより、変化した姿であり、他のダイマックスと違い、姿が全く別物に変わったように見える上、ブラックナイトを発生させる研究室で残った機械から観測されたエネルギーがオーバーフローしていたことからムゲンダイマックスと言われているものだ。

「文献が足りなさすぎるぞ」

ダイマックスについては、ガラル地方にのみ発生する現象であるため、メガ進化のようにメガストーンとトレーナーの絆によるものではないため、研究があまり進んでいない。

研究者といえど、簡単に実物を提供してくれるものは少ない。特に、田舎の若い研究者であればあるほど権威主義で功績主義の学会から提供されるのは完成された論文がほとんどであり、サンプルなどは希少なためかほとんどない。

トレーナーから借りるにも、ほかの色違いやリージョンフォームなどとは違い、キョダイマックス個体はバトルにおいて大きな戦力となる。つまり、虎の子をやすやすと他人の意味不明な研究というリスクに晒したくないのだ。

「…このままだと行き詰まってしまう」

ソニアも優秀とはいえ、研究生活もほかの研究者よりも短い。加えて、子育ても二人で行ってきたため、ホップのチャンピオンシップなどのバトルによる蓄えも、少なくなつた。

「…利用するようで悪いけど…」

ホップはスマホロトムから久々にとある人物の番号に発信する。

「ホップ?…久しぶり」

「久しぶりだな。ユウリ」

ブラツクナイト

ホップからの電話は久々で非常に心躍るようだった。たとえその内容が非常に独りよがりであつたとしても。しかし、その遠慮のなさが自分をいまだに頼れると考えていてくれるようで心地よかつた。「というわけでき、ちよつと研究でムゲンダイナをちよつと見せて欲しくてさ」

「いいよ。ちよつと忙しいから今日の…」

忙しいのは嘘ではないが、あえてすぐに会えるようにしたのはユウリのわがままだ。そうでもしなければ、ホップをいち早く見たいという自分の欲を抑えきれなかつたからだ。

ホップに恋をしているユウリは、ソニアから奪おうとも考えていない。それは、乙女らしい純情と、ホップに不倫する悪に染まって欲しくないからだ。いまだにユウリの中のホップは諦めのない純粹少年でいて欲しかつた。

その夜、ローズタウンの屋上でユウリはホップを待っていた。

「遅いよ。ホップ」

予定の時間よりも30分ほどオーバーしてホップはユウリの元へ、自分のアーマーガアに乗って現れた。口元に蓄えた髭や、少し伸びた髪、そして研究者らしい白衣を着ている姿にユウリはダンデとソニアの面影を見る。

「すまない！ホープが今日ヤローさんを倒したって連絡が来てさ！お祝いにビデオチャットしてたんだ」

「…いいよ。他人の私よりも家族を優先して」

ユウリはおめでどうの言葉が出なかつたことに自分がまだ幼い心のままであると感じ、恥じる。

「おいで、ムゲンダイナ」

ユウリがモンスターボールからムゲンダイナを繰り出す。長い尻尾をユウリに巻き付かせるように置き、ホップに対面する。どこか威嚇するような所作を見せるが、顔というものが曖昧なため、その行為が本当に威嚇なのか分からなかつた。

「久々に会った人だから警戒してるみたい」

ホップとユウリが、再会するのは約2年ぶりである。ホップの口元に蓄えた髭を見るたびにダンデの代用品ではないかとソニアを思っただものだが、見るたびに口ヒゲが似合っているホップを見て、自身身の勝手な解釈と感じるのが辛かった。

ムゲンダイナはしばらくするとユウリの動きを見てホップが警戒に値しないものと判断する。

しばらくムゲンダイナを観察するホップはいくつかの写真を撮り、それを収める。

「ありがとな、ユウリ！」

「いいよ、ホップのためなもの」

「欲を言うともゲンダイマックスの姿も見たいけどもう見れないしな」

「うん。今は見せれない」

ブラックナイトで見たムゲンダイナのムゲンダイマックスは、大量のねがいぼしと封印状態のムゲンダイナを覚醒させた、いわば目覚めた瞬間のトップギアを見せたに過ぎず、これが続けるのは不可能であった。

しばらく感慨にふけたあと、二人揃って屋上でガラルを見渡す。考え込むホップの横顔にユウリは勝利に燃えていた本気のホップの顔を思い出し、頬を赤らめる。

「なあ、ユウリ」

「…」

「ブラックナイトって結局何だったんだ？」

ブラックナイトについて、引き起こした原因とその首謀者であり、目的についてはひどく曖昧で、ガラル地方の安定とあったが、当時のローズは思考と現実の乖離が激しく、計画の失敗と社会的信用の喪失によるストレスで十分な証言が取れず、ローズの側近であるオリーブも炭鉱で奉仕していたため情報が得られなかった。

「…ブラックナイトは、周期的に来るムゲンダイナ復活のことを指してたみたい。封印状態のムゲンダイナも、ポケモンとしたらなんてこ

とない習性。ボールに入ることが前提の現代では忘れてるけど」

「ポケモンは瀕死に近くなると身を小さくして隠れる。そして暗雲はキョダイマックス時に立ち込める雲の巨大なバージョン」

それを踏まえるとブラックナイトというものが単なるマックスレイドバトルのように見え、そのポケモンとは認識できない見た目がポケモンに近くなって見えた。

「そう、ブラックナイトの正体は、ムゲンダイナのムゲンダイマックスの状態での復活のこと。そしてザシアンとザマゼンタのきよじゅうざん、きよじゅうざんでそれを撃退すること。ローズ委員長はその後にムゲンダイナを制御してムゲンダイナを超巨大なねがいぼしとしてエネルギー革命を行うつもりだったみたい」

「ん？じゃあいつでもいいんじゃないか？やろうとしてたことは別に悪いことはないし」

「それが違うの。まず、ねがいぼしを与えたムゲンダイナを起こす撃鉄が必要だった。その撃鉄が二つあって、一つはダイマックスバンドにあたるものの、2つ目がガラル地方全体の活性化」

「ダイマックスバンドはあの施設として、ガラル地方全体の活性化？」
「ガラル地方に存在するパワースポット、ジムがある場所では常にダイマックスのパワーが溢れてるけど動きがあるのは少ない。けど一年で一番ダイマックスパワーの動きが活発になる時がある」

「…ジムチャレンジか」
「そう」

ジムチャレンジ期間はファイナルトーナメントへの出場人数ではなく、期間であるため、理論上全員がチャンピオンカップに出場できる。それがなされないのは、キバナのジムで殆どのものが脱落しているからだ。

ガラル地方の至る所でダイマックスが行われるのはジムチャレンジのみである。連日ジムリーダーがマイナージムリーダーと対戦が行われているにも関わらず、活性化とはいかないのは、テレビで言えば視聴者の兼ね合いと、ヒト、モノ、時間の流れを収まる範疇に抑える必要があるからだ。

「だからチャンピオンカップのファイナルトーナメントなのか」

「そして私たちのジムチャレンジャーあたりでチャレンジャーが少なくなっていた」

ファイナルトーナメントの前には、予選があり、すべてのジムでバトルが行われる。ローズがユウリの時代で強行した理由の一つに参加人数が減少傾向にあったため、これ以降チャンピオンカップのような規模で興せるものはなく、千年後に緩やかに減んでゆく未来が見えたのだろう。

それほどまでに無敗のチャンピオンであるダンデは眩しく、一人だけ食らいついていたキバナさえも、徐々に疲れが見えていたのだろう。

ダンデを意識しているのか、ドラゴンタイプでも強者であるドラパルトを使わないことや、サザンドラを使わず、コータスを採用していることからドラゴンタイプという縛りすら守っていないという層もあったため、チャンピオンカップに熱狂している数は目に見えて減っていた。

その最たる証拠がビートである。主催者側から挑戦者を出すなど、八百長の危険もある。加えて、従順なマクロコスモスの若手社員ではなく、孤児院出身のビートを出していることから、マクロコスモスもローズの手腕から役員による先導がなされていて、皮肉なことにワンマン経営が脱出しつつあったことを示唆していた。

「無敗のチャンピオンの弊害か…」

「私も感じてる。私がいなければガラルのポケモンリーグはもっと盛り上がったのかなって」

「…」

毎年ユウリから送られる推薦状に研究や子育てといった理由で参加しなかった。ユウリに肉薄できるのはホップ・ダンデ・ミツバ・マスタートドぐらいだが、ヨロイジマで道場を営むマスタートド夫妻は無論、前チャンピオンであるダンデは参加が憚られる。

結果としてホップを求めるが参加しない、伝説の片割れを持つホップがいなくなれば、結果は「どうせ勝てない。準優勝でジムリー

ダー候補になる」というハードルの低い考えに至り、バトルのランクも低くなる。

そんなことは露知らず、ダンデやユウリには到底勝てないと思い込んでいるホップは参加はしなかった。

「…。ホープがユウリを打ち負かしたらどうする?」

硬くなった空気を柔らかくするためにホップはあえて冗談めかしてユウリに話題を振る。以前のユウリならば、「また勝てるように修行する」「マスタードさんみたいに道場でも開こうかな」のような明るい返事が返ってくると思ったからだ。

その言葉に対して、ユウリはピクリと反応する。息子への期待。冗談。未来の想像。そのような単語が駆け巡るが、その先にあったのは無であった。

「…。それが たとえ できたとして わたし は もう この 20ねんを とりもどせない」

底冷えするように放たれた言葉はホップに異様な寒気を感じさせる。何も映していない瞳がホップを見定め、歴戦のパートナーであるポケモンたちは、ホップを守るかのようにボールを震わせて威嚇する。

「…。久々に楽しかったよ。じゃあまた」

ホップが何かを言う前に、ユウリはアップリューを取り出し、飛び立つ。

呆氣にとられたホップは自分の言葉が意図せず傷つけていたのかと、その場に立ち尽くす。華々しい映像しか知らなかったことと、変わらぬ姿にかつてのユウリがそのままいると感じていた。

しかし、実際は言葉の節々に、明確に自分を他人と呼び、自分がいなくなればというマイナス思考が確かにあった。

「…」

既にユウリは見えなくなっている。今からアーマーガアを出しても、ユウリのアップリューには届かないだろう。

ホップは何も言えず、何か言ってしまうえば今までの、薄れてしまっ
ていても良きライバルとしての関係がなくなってしまうと感じ、その

場を後にした。

・バウタウン

海辺の漁村であったバウタウンは、20年間で景観が整備されている。かつてあった屋台のおこう売りも彩のあるテナントの内部にある。オーシャンビューのレストランでは二人の女性がランチを食していた。

「やっぱり最近のトレーナーは甲斐性がないね！ドンとチャンピオン狙うって言わないと！」

「それは同感です。仮に無謀だとしても目標より上に行くことはありません。結局ジムリーダーを目指してもジムトレーナーが関の山ですし」

「ほんと誰なんだろうね！ジムトレーナーは安定で休みも多いだなんて！聞いたかい？今のガラルじや恋人候補はジムリーダーよりジムトレーナーやマクロコスモス子会社の人間だとさー」

「ジムリーダーに雇われているジムトレーナーとマクロコスモスの子飼いの子飼いの、何が良いのか」

それぞれマイナーリーグのジムリーダーであり、ポンチョのように大きめのシャツを着たサイトウトと、気品あるワンピースを着たメロンが話し合っている。どちらも20年が経ち、サイトウトは引き締まった体のままだが、かつてのゴリキーと同じ運動量ができた体と違い、人の範疇での高い身体能力に留まり、メロンは半分引退したようなものだ。

「…今ならオフだからバトルならまたにしておくれ」

二人の前に喪服を模したようなシックなデザインに無限の記号を纏むような手のデザインがあしらわれた5名ほどのグループが集う。

メロンたちは顔を向けずにあしらう。姿は見ずとも、人として感じる異様な雰囲気に含まれているのがわかる。

「ジムリーダーのメロン様、サイトウト様、取り戻したい栄光はありませんか？」

その単語に両者がピクリと反応する。サイトウトもメロンもかつてのメジャーリーグのジムリーダーであり、その神経を逆撫でする発言

は瘡に触った。

「そういう言葉は人を怒らせるって母親に…」

ストイツクに鍛錬を続けていたサイトウと自身もポケモンバトルに対して真摯に向き合ってきたものとして、一言言いたくなつたメロンはその人物の顔を見る。そしてその人物を見た時、それが煽りではないと確信する。

「どういう風の吹き回しだい?..」

あまりの雰囲気の違いに分からなかったが、その顔は、ローズとユウリの秘書であり、マクロコスモスの一員でもあるオリーフであった。

バウタウン

オリーブの一連の話を聞いたメロンとサイトウは、話の整合性については、非常に納得したようであった。しかし、一切の同意を示さなかった。

「何故です。辛酸を舐めて、苦悩の中にいるはずなのに」

「苦悩とは自身の奢り、辛酸を舐めるのは自らへの叱咤です」

「それに歳を取ると酸味辛味もよく感じるもんでねえ」

サイトウとオリーブはそれぞれマイナーリーグに降格と言う汚名を受けてから、ずっとメジャーリーグへの復活を果たせていなかった。

それにはメロンには息子であるマクワという存在が、サイトウは自分よりも若くジムリーダーに抜擢されたオニオンの存在があった。

ダンデが全盛期の頃は2人がそれぞれの息子と後輩でしのぎを削る合うようであったが、ユウリがチャンピオンになってからはメジャーリーグへ上がる事はなかった。理由は定かではないが、ユウリがいた時のジムリーダーが常に固定されているようで、そのポケモンたちも一段階何かが変わっているようだった。

「過去をやり直せるならば、より強いポケモンを手に入れることも、新たな戦術を得ることもできるのに」

「道とは一本のものです。振り返ることはあれ、後戻りは後退でしかありません」

「それに自分だけ有利つてのも気が引けるしねえ」

後継者を捕まえる事はジムリーダーの責務であるためメロンは教え子を、サイトウは門下生を抜擢しようとしたが実力はあまりにかけ離れていて表に出せば彼らが真っ向から批判を受けると言うのが目に見えていた。

その点で言えばオリーブの話は非常に魅力的ではあった。しかし彼らはジムリーダーとして彼ら自身の経歴に絶対のプライドがあり、それを咎める事は今まで自分たちを指導又は親身になっていたものに対して不敬に当たると言う考えから申し出を断った。

その返答にオリーヴは残念そうに表情を浮かべるものどこか安心したような自分たちが向かうべき姿を見ているようであった。

「話は以上です。賛同を得られなかったと言っても危害は加えませんが、ムゲン団は新たな未来に向けて歩むのが目的。現在にこだわるは必要ありませんから」

「…そのセリフは誰かからの受け売りですか？」

立ち去るオリーヴにサイトウが声をかける。

「どういうことでしょうか」

「歳を取ると力は衰えても理が増えます。理とは物事に対する理解のこと。貴方からは目的があってもそれを実行する気がなく見えます」
「そんなことはありません。わたしはあのお方の過去を変えたい。それだけです」

そういうと、オリーヴは団員を引き連れてその場を後にする。他の団員は、理解ができないという顔つきと、羨望の眼差しがあり、敵意はなかった。そのことから本当に自身の目的を達成することだけが全ての団体に見えた。

「恐ろしい集団ですね」

「まったくだよ。あれは本当に目的に執着してる人間、未来か過去かの違いだけでその思いだけはチャンピオンを目指す若いチャレンジャーと同じさ」

すっかり冷めてしまった昼食に手をつけ、二人は元の会話に戻る。ポケモンとは一切関係のないたわいない会話が続く。

・バウタウン

バウタウンのジムではジムリーダーであるルリナとチャレンジャーであるホープが対峙していた。

「本当、年が経つにつれて、嫌になるくらい似ているわね」

「へへ、買い物行っても父さんと似てるってよく言われるぞ」

「ソニアとよ」

「え？」

「その目元、そっくりだわ」

ルリナはソニアの親友であり、ホープもよく知っている間柄であ

る。かと言って、ジムチャレンジが優遇されることはなく、正規の手順を踏んでこの場に立っている。

「さて、世間話はおしまい。これからは一ジムリーダーとして、あなたがホップとどれだけ違うか試すわよ！行きなさい！キバナニア！」

「行くぞー！ハスブレロ！」

ホープの手持ちにはハスブレロが加えられており、5番道路で手に入れた。レドームシのような誰かとの思い出はないが、ホープが一人で捕まえた最初のポケモンである。

キバナニアはヨロイジマで発見されるポケモンであるが、チャンピオンがヨロイジマに修行に行ったことを皮切りに、海でヨロイジマへゆくトレーナーを追いかけたサメハダーが生息域を広げたためにガラル地方の近海でも捕まえることができた。漁師の娘であるルリナも例に漏れず、年齢により引退したトサキントからキバナニアに変更していた。

「ハスブレロ、メガドレイン！」

「キバナニア、どくどくのキバ！」

本来水中で生活しているキバナニアは、スピードは劣るものの、強靱な牙は一切衰えを見せずハスブレロに突貫する。ハスブレロは、迫るキバナニアに狙いを定め、薄緑の波紋を当て、自身の体力とキバナニアの体力をつなぎ、吸収する。キバナニアはメガドレインによる体力吸収を意に介さず、ハスブレロの左腕に噛み付き、猛毒を持った牙を突き立てる。

「ハスブレロ！もう一度メガドレイン！」

キバナニアが噛み付いていることを好機に、ハスブレロは再びキバナニアの体力を吸い取り、キバナニアを戦闘不能へ引き摺り込む。

しかし、その代償は大きく、左腕に注入された毒がハスブレロを蝕み、青い顔を浮かべる。

「…中々ね。次はどう？行きなさい！ウツウ！」

ルリナはキバナニアをボールに戻し、ウツウを繰り出す。青色の首の長い大きなくちばしを持つ鳥のポケモンが現れる。

「ウツウ！ついでに！」

ウツウは長い嘴を器用にハスブレロの喉元に滑り込ませ、連続で捕食する様にハスブレロを突く。くさタイプであるハスブレロは、効果抜群であるひこうタイプの技を受け、よろけ、覚束ない足取りでその場を徘徊するように回ったあと、目を回し、倒れる。

「ありがたい、ハスブレロ！行くぞ！レドームシ！」

ホープはハスブレロをボールに戻し、レドームシを繰り返す。

「わざわざむしタイプのレドームシを出すなんて、ウツウ！もう一度ついでに……！」

ルリナは、ひこうタイプのウツウにむしタイプのレドームシを出したことに若干の落胆を感じるものの、指示を出す。しかし、ウツウはレドームシを認識していないのか、頭をぶんぶんと振り、レドームシとは真逆の方向に走り出し、地面をついでに、口元をスタジアムの破片塗れにする。

「もしてかして」

「ハスブレロのフラフラダンスだぞ！レドームシ！ウツウに気にせず連続でねんりきだ！」

レドームシは自身の発光器官から淡いピンク色の波紋を出し、ウツウにサイコパワーを放つ。

「ねんりきは相手を混乱させる場合がある。混乱させて行動させない目的ね！」

「予習は基本って父さんが言ってたからな！」

ウツウの特性であるうのミサイルは、ダイビングやなみのりにより、どこからともなく飲み込んだピカチュウやサシカマスをぶつけるという弩級の特性を持っており、特定の技をし続ければ体力が続く限り、うのミサイルが発射される。

それを阻止するために編み出したホープの技がこのこんらんさせながらねんりきで遠くから狙い続けるという戦法であった。

ウツウはなすすべなく、ねんりきの波動とフラフラダンスによる混乱で身動きが取れず、戦闘不能に至る。

「……さすがホープという名前をつけられるだけはあるわね」

一度深く息を吸うとボールを取り出し、ホープの前に見せつける。

柔軟性と細く長い足を強調するフォームで投げ出されたポケモンは、堅牢な装甲に隆起した牙を持つカジリガメである。

「さあ、正念場よ。最後の1匹じゃないの、隠し球の1匹よ！カジリガメ！ダイマックスなさい！」

いつも通りの自身に込める絶対なセリフをホープにぶつけ、ダイマックスバンドを反応させ、カジリガメをダイマックスさせた。

カジリガメはキョダイマックス個体ではなく、ジムチャレンジのために調整された個体である。それでもジムリーダー肝煎のポケモンであるため、ルリナには相性不利であろうと自信満々でホープのレドームシの前に君臨する。

「さあ、受けてみなさい！ダイロック！」

「レドームシ！ひかりのかべ！」

カジリガメが地面を叩き、岩盤のような岩の塊を繰り出し、レドームシにぶつける。レドームシは最後の力を振り絞るかのようにひかりのかべを貼ろうと奮起するが、叶わず、倒れる。

「レドームシ、よくやった。俺も隠し球のポケモンだぞ！」

ホープは、ルリナと同じセリフをつかい、ラビフットを繰り出す。

「ラビフット！コッチもダイマックスだ！」

ホープはダイマックスバンドと反応させ、ラビフットをダイマックスさせる。

「カジリガメ！ダイストリーム！」

「ラビフット！ダイウォール！」

カジリガメは泡沫を纏いながら突撃するが、ラビフットの展開したダイマックスパワーによる防御がそれを弾く。

(やはり炎タイプだから守ってくるわね！)

「ラビフットは炎タイプ！これで終わりよ！ダイストリーム！」

「それを待っていた！ダイサンダー！」

「ダイサンダーですって!?!」

ラビフットの首元から腕にかけて生えている赤色の毛皮が黄色に変わり、それが発電器官となり、電気を纏い、それを放出する。ラビフットは炎タイプであるが、ホープのラビフットの特徴、リベロによ

り、電気タイプとなり、ダイストリームで突撃するカジリガメの攻撃は半減され、効果抜群に加えてタイプ一致のダイサンダーはカジリガメの体力の半分以上をもぎ取る。

「技レコード、これは私の負けね」

空気が抜けるような音とともに、ダイマックスエネルギーが放出され、元のサイズのカジリガメがその場に残った。

通常、ラビフットは成長過程で電気技を覚えませんが、唯一、技レコードにより覚えられる技がある。それがエレキボールであり、ようなきな性格のラビフットには相性の悪い技であるが、持続時間の短いダイマックスポケモンの水タイプの技を受け切り、2度目の攻撃により、決着をつけるという考えでは、それは有効な手であった。

「ラビフット、ダイサンダー！」

「カジリガメ！間に合わなくていい！がんばせきふうじ！」

しかし、勝負を諦めることはせず、カジリガメに指示を出し、ルリナは最後の一撃を目に焼き付ける。一見するとポケモンを危険に晒すような行為だが、カジリガメもまた、トレーナーに似ていて、最後まで死力を尽くすというモットーがあり、満足げな表情で目を回した。

「おめでとう、ジムチャレンジ成功よ」

握手をしながらルリナはホープを称える。ギリギリとはいえ、弱点のポケモンの弱点を突く攻撃は、初心者トレーナーだけでなく、ベテラントレーナーでも厳しい。

それを分かっていたながらの戦術であったが、それを打ち負かすホープには感嘆の表情が出た。

「そうだ。これをあげる」

会場を後にしたルリナは、ホープにとあるものを渡す。普段は技マシンを贈呈するのだが、ルリナが渡したのはみずのいしであった。

「ハスブレロの進化に使えるわ。それにしてもまさかりベロのラビフットなんて珍しいポケモン、さすがソニアね」

「違うぞーこのラビフットはチャンピオンからもらったんだ！」

その単語を聞いて、ルリナは驚愕の表情を出す。じきにどこか安

心したような顔をして、ホープの目を見る。

「そう。失礼したわ。そのポケモン、大事にね」

そう言っつてルリナは手を振って場を離れる。ホープはそれを見送りながら、手を振って別れを告げる。

(チャンピオンも、ようやく立ち直れたみたいね)

なまじチャンピオンとソニアの両方に20年以上の付き合いがあるルリナからしてみれば、ホープにチャンピオンがポケモンを、それも虎の子であるリベロの特性を持ったヒバニーを与えるのは、考えても見なかった。

年々会える機会が減り、推薦状を送るも、理由をつけてチャンピオンカップに参加しないホップにさえ、10代にしてチャンピオンと英雄の重荷を背負ったユウリは、かつてのバトルの接戦具合からホップに依存していた。

そのため、ホップの結婚時には普段見せないほどの狼狽具合をルリナに晒していた。ルリナはユウリのホップへの歪な感情が治ったと感じ、軽い足取りでスタジアムに戻った。

エンジンシティ

古い町並みの中、一際新しく見えるタワーがエンジンシティに立っていた。

これはムゲン団の本拠地であると推測されている。このタワーはマクロコスモス社が建築したポケモンリーグ再出発を記念したものである。見た目はレンガ造りであるのに反し、その実エネルギー開発や願い星のエネルギー抽出の効率向上を狙う一般社団法人である。とは言っても寄付やボランティアTシャツの販売収益や企業への技術売買による売上げがほとんどであり、研究のサンプルの営業も個人の意思によるものだ。時計を大きく前面に出しているその建物はムゲンタワーとも呼ばれている。

20年の時を経た今エンジンシティはかつてのスチームパンクじみた中世を思わせる機械的な作りから、機械の中から植物が生えたような、長い年月の中で風化した街並みといった雰囲気を感じる風貌になっていた。

「やっとここまで戻ってきたぞ」

バウタウンから戻ってきたホープは、エンジンシティのジムの前に向かおうとしていた。エンジンシティの街並みが見える橋にはいくつかの屋台が設置しており、屋台の定員はいずれもムゲン団のTシャツを着ている。そのマークは一般に売られているものとは異なり、ムゲンのマークを掴むようなデザインであった。店員は10歳にも満たないようなスクールボーイと、もう1人は30代前半の女性であった。一見すると親子に見えたがその顔は全く似ておらずお互いを名前呼びやっている事から赤の他人であると推測される。

屋台ではアローラ地方の名物として認識されているマラサダが売られていた。その客の中にホープがよく見知った人物がおりバックに付けられた願い星のアクセサリーがその方向に少し揺れたように感じた。

「チャン：：グローリアじゃないか！」

「ホープ、久しぶりね。どう？マラサダ。一緒に食べない？」

「ああ！頂くぞ！」

久々と言っても、1週間もたつてない再会ということで、グローリアはカラサダを注文し、ホープはアマサダを注文する。2人で端を歩きながらホープはこれまでの旅路を語っていた。

「良かった。ジムチャレンジは順調らしいね」

「ああ！レドームシも大活躍だったぞ！」

ボールからレドームシを繰り出し、その様子を見せる。移動の最中ともあり、トレーナーとバトルしていたためか、甲殻には細かい傷がいくつもついていたが、きずぐすりでも治る範疇であり、ホープとポケモンが確実に成長しているのが、グローリアにはわかった。

「それにしても、なんでムゲン団がマラサダを売ってるんだ？」

「噂によると、資金集めの一環らしいね。あと就業支援とか」

「へえ。グローリアは物知りなんだな」

ホープにとってムゲン団の第一印象は、小悪党であったが、それが一部の名前を借りた連中であると知っていた。しかし、一度着いたイメージは崩れにくく、ムゲン団がなんとなく悪い人間のように見えていた。対して、グローリアはそれほど悪い印象は、持っておらず、カラサダを受け取る時もどこか優しげであった。

グローリアとしばらく歩いていると、ムゲン団らしき団体が言い争っているのが見えた。

「だからムゲン団のイメージを下げるのはやめて下さい！」

「ムゲン団がムゲンの愛集めて何が悪いってんだよ！」

先ほどのマラサダを売っていたものと同じ、無限のマークが書かれた方のTシャツを着たムゲン団の女性と、通常の販売用のTシャツを着たムゲン団らしき二人組が争っていた。

その間にグローリアは入り、騒動に巻き込まれようとする。

「…そのムゲンの愛ってなんですか？」

「グローリア?!」

「ああ?!ムゲンつつたら尽きないことよ！」

「俺たちムゲンの愛を求める戦士ってわけよ！」

「…」

軽薄な笑みを浮かべる二人にグローリアは青筋を立てる。助けを求めるムゲン団の女性は、壊れたボールしか持っておらず、威嚇するためのポケモンすらも持っていないようだった。

「助けて下さい！この人たちムゲン団になりきって強引にナンパしてくるんです！」

「ホープ、いける？」

「またこれか！いいぞ！やってやる！」

「ああ？やるのか!？」

「カップルが助太刀か？よろしくやってんなオイ！」

ムゲン団？のしたっぱ二人が勝負を仕掛けてきた。ムゲン団らしき男性2人組は、ルナトーンとシンボラーを繰り出す。

「行くぞ！ラビフット！」

「行きなさい、ポリゴンZ」

ホープはエースであるラビフットを呼び出し、グローリアは怪しいパッチによって異なるアップデートを果たしたポリゴンZを繰り出す。

「シンボラー！エアカッター！」

「ルナトーン！いわなだれ！」

こなれた様子で指示を繰り返す男性二人は、明らかな敵意を向けてホープたちと対峙する。上空からは岩の塊がいくつも展開され、シンボラーの奇妙な翼から空気の刃が舞い、ラビフットたちに襲いかかる。

「ポリゴンZ！こごえるかせ！」

「ラビフット！ルナトーンににどげり！」

ポリゴンZは浮遊する体を変形させ、尾と手で三角の点を作り、氷のエネルギーを集め、一気に放射する。氷の粒を纏った風は、いわなだれの破片を削り取り、エアカッターの刃を霧散させる。その風を全身に浴びたシンボラーは凍て付く。ラビフットの体毛が筋繊維を思わせる模様に変わり、にどげりによってルナトーンの外皮は凹み、二つのクレーターを残してその浮遊能力を失う。

「ちくしょー！ムゲン団ならいい人って思われると思ったのに！」

「これが、愛の力？」

ムゲン団の格好をした二人組は不格好に逃げ出す。単なる迷惑行為のため、警官を呼んでも注意だけにとどまるだろうと、グローリアを、その様子を流す。

「そのボール、あいつらにやられたのか？」

ホープは、壊れたスーパボールを握りしめる女性に対し、心配そうに話しかける。

「これは…ジムチャレンジの時にワイルドエリアで…」

その単語でホープは気まずそうに視線を逸らす。ジムチャレンジはその特性上、自然がそのまま残されたような魔境のワイルドエリアでポケモンを捕まえることが多々ある。

ホープ自身もワイルドエリアでエレキボールの技レコードを手に入れたが、その分ギャラドス同士の争いに巻き込まれそうになったことがあり、その危険性から、起きたことを予想できてしまった。

「…ごめんなさい」

「…いいのよ。変にボールを残してる私が悪いんだから！あ、こ、これ御礼ね！」

ムゲン団の女性は、鞆から一冊の雑誌のような物を取り出し、ホープに渡す。

「ロトムのカタログ、もしロトムを捕まえたら使って」

そう言って女性は頭を下げると走り去ってゆく。ホープはしばらくロトムのカタログをしみじみと見ていたが、ふと、何か紙のようなものが挟まっていたのに気づき、それを引き抜く。それには、先ほどの女性の面影のある少女がスーパボールを握り、ロトムと共にツーショットをしている写真であった。

「…ムゲン団の福祉活動をしてる人は、いろんな事情がある人もいる。そういう人は心の何処かで過去でもっと楽しめばよかつたって思ってる人もいるから、あんまりああいふ連中に強く言えないの」

その様子を見ていたグローリアは、どこか悲しげな表情でホープの隣に立ち、ロトムのカタログを見る。ホープの持っているカタログに力が込められ、少しのシワが入った。

・エンジンシテイ

エンジンシテイのポケモンセンターで、しばらく先ほどのことでもできなくなっていた。グローリアには、彼女がユウリであると聞くこともできず、エンジンシテイの入り口で別れた。

ホープは、ふと、ムゲン団について何も知らないと思い、スマホロトムを起動させて、検索する。

ムゲン団

『マクロコスモスの設立した施設が、とある団体と合体し独立したものとされている。』

主にエネルギー研究、福祉施設の運営とジムチャレンジャーのサポートを行なっている。

協賛している法人・個人に支援グッズを卸している。

近年は、支援Tシャツを着て、ムゲン団を語る半グレなどがある。

正規の団員はムゲン団のロゴに無限のマークが付けられている。

マクロコスモスのみがチャンピオンの隠れたスポンサーでもある噂がある』

「だからムゲン団に詳しくあったのか」

その是非については差し置いて、自身のスポンサーについては正規であろうと自称であろうと、素性を調べるのが筋である。

ホープが知らなかっただけで、ムゲン団は各地に分団や、支援者がおり、ガラル全体に広がっていた。

「…後悔しても仕方ない！今はジムチャレンジだ！」

ホープは自身のほおを叩き、エンジンシテイの解説を持っている雑誌風のタウンマップで確認する。

『カブ・古参のジムリーダーにして、永遠に燃え続けることをモットーとしている。ホウエン地方出身で若い時は挫折を味わうなど、波乱万丈の人生を送っている。』

エースであるマルヤクデは、2代目で高い火力を持つ。ジムミッションを突破できるのは、ジムチャレンジ参加者の全体の5割と言われている』

ホープら、カブのいるエンジンスタジアムに向かい、ジムミツシヨ

ンの受付を済ませる。ユニフォームに着替え、ジムトレーナーから説明を受け、ジムミッションが開始される。

ジムミッションは年々その対策が練られている。特にルリナに至っては、ミッションが排水管を使ったパズルのようになっていることから、突破者が掲示板に挙げれば、すぐに攻略できる。加えて、パズルの変更には工事費用がかかるため、ジムチャレンジが低迷していた影響があつてほとんど変わっていない。一方で、ヤローのジムミッションはウールーを転がすだけという初見でもルールが分かることである。その分、内容の変更が簡単で、ウールーの使い勝手が難しいため、ルリナよりも苦戦していた。

カブのジムミッションはトレーナーの行動が付与され、5ポイントが貯まるとジムリーダーとの対戦だ。攻略に個性が出ることも多く、ジムミッションに出てくるポケモンは捕まえることができるため、炎タイプのポケモンに対策がなければ、同タイプやもらいびの特性を持つヒトモシなどを手持ちに加えるというある種の救済処置としても機能している。

ホープの作戦は、ポイントが貯まるまで出会うもの全てにバトルするという単純なものだった。

「ジムミッションであいがしらのトレーナーとポケモン全部で勝負の選択をするとは…中々熱いね。ホープ君」

「目と目があつたらバトル！がポケモントレーナーだからな！」

ジムミッションを難なく踏破し、ジムリーダーであるカブと対峙する。真っ白になった髪と、深いシワに、かつて維持していたであろう筋肉は筋っぼくなっている。しかし、長年維持していた正しい姿勢は残った体幹に支えられており、燃え尽きた蠟燭ではなく、未だ燃え続ける篝火のような印象を与える。

「君を見ていると若い頃のホップ君を…いや言つてはだめだな。過去ばっかり見ているなんて、これじゃ頑固なじじいだ。」

さて、ここまで来るのには相当な苦勞をしたと思う。若さもあつて無理を通したこともあるだろう。

けれど、厳しいことを言うけれど、今から見せてもらうのは努力の

跡ではなく、君の実力、ポケモンとの絆。

全てが出し切れるよう、僕らも全力を尽くす。

さあ！老いぼれのじじいだと甘く見ないでくれよ！」

試合開始の合図と共に、カブは往年のフォームでポケモンを繰り出す。9本の尾と金色を帯びた毛並みのポケモン、キュウコンを繰り出す。

「いこう！キュウコン！」

「いくぞ！ルンパツパ！」

ルリナからもらったみずのいしから進化したルンパツパは進化した姿でのバトルで張り切っている。

「ルンパツパ！あまごい！」

「キュウコン！うらみだ！」

ルンパツパは口から激しく大量の積乱雲を一気に吐き出し、スタジアムの上空に雨を降らす。それと同時にキュウコンが尾から4つの靈魂のような物を放出し、ルンパツパに当てると、雲の塊がルンパツパから透けて飛び出し、そのまま霧散する。

雨に打たれながらルンパツパは自分から抜け落ちたものに驚き、雲を吐こうとするが全く出ず、慌てながらくると回る。

「あまごいがもう使えないのか?！」

「その通り、ほのおタイプにとって水が滴るフィールドは心地よくなからぬ。晴れるまで粘らせてもらおうよ。キュウコン！あやしいひかり！」

混乱による戦法でルリナを下したホップは、その脅威を知っている。ルンパツパに向かって大きく声を出し、指示を出す。

「ルンパツパ！滑走して避けながらバブルこうせん！」

ルンパツパはその指示によつて我に帰り、ぬれたじめんに濡れた地面に頭の皿をつけ、コマのように回転ながらフィールドを滑走し、キュウコンから発せられたどんよりとした玉虫色の玉を避けながらキュウコンに大量の泡を当てる。

「速い！そのルンパツパはすいすいの特性か！」

キュウコンは当たった泡から弾かれるように放たれる水流の連続

に耐えきれず、倒れる。

「ナイスファイトだキュウコン！頑張れ！ファイアロー！」

キュウコンがボールに戻るのと交互に、猛禽類特有の筋肉のついた、朱い体をもつ鳥ポケモンであるファイアローが繰り出される。

「ルンパツパー！もう一度バブルこうせん！」

「ファイアロー！フェイント！」

ルンパツパーは高速でファイアローに接近するが、ファイアローはそれを躲し、通り過ぎ様に爪でルンパツパーを引っ搔く。体勢を崩したルンパツパーのバブルこうせんは明後日の方向に飛び散り、ファイアローは旋回してルンパツパーの懐に入る。

「ファイアロー！アクロバット！」

懐に入ったファイアローは、強靱な足の鉤爪でルンパツパーを捕まえ、空中に投げつけ、それを追いかけるように、嘴、爪、翼でルンパツパーに追撃する。

落下するルンパツパーは受け身の取れない体勢のまま落下する。

「ルンパツパー！フラフラダンスで体勢を直すんだ！」

ホープの指示にルンパツパーはその手と胴を動かし、器用に体勢を整えると地面に弾むように受け身を取り、そのまま頭の皿でフィールドを滑走する。しかし、ダメージは大きいのか、滑走と並行している回転が先ほどよりもかなり遅い。雨の勢いが少し弱まり、スピードも遅くなる。

「ルンパツパー！広範囲にバブルこうせん！」

「ファイアロー！アクロバットで接近するんだ！」

ファイアローはその翼を羽ばたかせ、回転をしながらフィールドを埋めんばかりに泡を展開するルンパツパーに、泡に身体をよじり、回転しながら接近を試みる。

「今だ！ギガドレイン！」

「ほとんど効かないギガドレインを！何かある！ファイアロー！一旦距離を！」

ルンパツパーは体から緑の波紋を発し、ファイアローはそれを避けようとするが間に合わず、空中で停止する波紋が、雲の隙間から覗いた

日光で反射されるフィールドに撒かれた泡にぶつかり、弾け飛ぶ。

ファイアローの身体を水しぶきが襲いかかる。

「っ…フレアドライブだ!!」

ファイアローは心得たように身体中を炎で包み、突貫する。水しぶきが炎を弱めるが、ファイアロー本体へのダメージが軽減され、ルンパツパに直撃する。

水蒸気が霧のように辺りを包み、雨雲が裂ける。燦々と照る太陽のもとには、お互い弾かれ、目を回しながら地面に伏せるファイアローとルンパツパがいた。

「ありがとうファイアロー!」

「よくやった!ルンパツパ」

お互いがボールにポケモンを戻し、カブは最後の1匹を取りだす。

ホープは、相棒であるラビフットを繰り出し、二体の炎ポケモンが対峙する。

「さあ!魂を燃やすぞ!力を貸してくれ!マルヤクデ!」

「がんばれ!ラビフット!ダイマックスだ!」

「ほのおは上に燃え上がる!ぼくらの魂も燃え上がる!マルヤクデ!キョダイマックスだ!技も姿もフィールドも!ほのおに変えろ!」

ホープがラビフットをダイマックスさせると、それに応戦するように、カブはダイマックスパワーをボールに込め、目に確かな炎と灯し、巨大化したボールの重みで軋みそうになる身体をよじり、力の流れをつけ、マルヤクデのボールを投げ、キョダイマックスさせる。

巨大化していくマルヤクデの体長は伸び、触角が発達しながら火を灯し、腹には特有の模様が浮かぶ。

「ラビフット!ダイアタック!」

「マルヤクデ!ダイロック!」

ラビフットの赤色の毛皮が薄い灰色になり、強化された身体能力がマルヤクデの細い身体にぶつかるが、マルヤクデもどこからか岩の破片を浮かべ、それを体に巻きつけて横薙ぎにラビフットの腹にぶつける。

「!!そのラビフット!炎タイプじゃないね!」

「どんな技が来るかわからなかったからな！」

ほのおタイプのラビフットがダイロックを受けたにもかかわらず、まだまだ体力が残っている様子から、早々にカブはラビフットの特徴がリベロであると察し、ダイアタックの副次効果によるマルヤクデの減速からタイプによる有利が取れないことを悟る。

「ラビフット！ダイナックル！」

「マルヤクデー！キョダイヒヤツカー！」

ラビフットの強力な回し蹴りがマルヤクデの頭部を捕らえるが、それと同時にマルヤクデから爆炎が吹き出し、ラビフットにムカデがこのような炎がまとわりつく。

「キョダイヒヤツカー！君のポケモンは炎に蝕まれる！」

「っ……！」

元は炎タイプのラビフットが炎に苦しめられる姿を見て対策を考えるが、策に気がついてしまった。

(次のターン、ダイウォールがあれば、ラビフットはダメージだけを受ける。そしてダイロックがあつたことからほのおタイプは不利、けどほのおタイプ以外だとやけどを負う可能性がある。けど、マルヤクデも体力の限界に近いはず)

タイプが実質4つあるラビフットは何に対しても対応できるが、逆に言えば、それぞれのタイプが最短1ターンしか持たず、同じタイプと闘うアドバンテージが消える。

エレキボール、ニトロチャージでは、ダイロックの元の技で不利をとり、にどげり、でんこうせっかは火力が低い。

「ラビフット！ダイナックル！」

「マルヤクデー！ダイウォール！」

ダイマックスパワーを集めたバリアにラビフットの蹴りが止められ、お互いにダイマックスが解ける。

「ラビフット！でんこうせっか！」

先に動いたのはラビフットで、ダイアタックによる速さを利用し、ヒットアンドアウェイ戦法をとる。

「マルヤクデー！えんまくー！」

ラビフットがでんこうせつかによる突撃の瞬間、マルヤクデは地面に向かつて黒煙を吹き出し、その姿を隠す。ラビフットはマルヤクデの姿を見失い、ついに、キョダイヒヤツカの炎に耐えきれず、地に伏す。

「ラビフット…ごめんな。あとすこしだ！レドームシ！」

レドームシはマルヤクデにとって特大のカモである。炎タイプだけではなく、自身のタイプである虫タイプにさえ弱い。

「マルヤクデー！かえんぐるまー！」

「レドームシ！ねんりきー！」

マルヤクデは長い身体を円状に丸め、炎の車輪となってレドームシを襲う。レドームシは固い甲殻を持つ反面、非常に鈍足であり、まともを受けるしかなかった。

かえんぐるまの炎と、マルヤクデの節足がガリガリとレドームシの甲殻をえぐり、再三修復された発光器官は色を失う。

「耐えろーレドームシー！」

それでもねんりきにより、勢いを殺し、回転を緩め、炎をほぐし、ついにはマルヤクデを平常の状態にまでに戻し、そのまま壁に叩きつける。

壁に打ち付けられたマルヤクデは目を回して倒れる。

ホープの辛勝が叶った。

ラテラルタウン

旧時代的な建物が立ち並び、かつてはトタン屋根を歩くこともできた、ラテラルタウンは、近代的な建物がいくつか増設されており、古くから住む住民たちの建物は、改装により整備されていた。そのラテラルタウンのジムは、年によってメジャーリーグとマイナーリーグそれぞれのジムリーダーが交代し合う激戦区でもあった。

『オニオンとラテラルタウン：気弱そうな青年でありながら、20年以上メジャーリーグの座を守り続けている豪傑である。』

かつてはサニーゴの死骸を上にしていたが、現在は三日月状の顔半分を隠すだけの仮面となっている。

それは肉体の成長とともに自信がついたとも言われている。一方で、1番のお気に入りのお面が破損したため今の形に加工したとも言われている。ゴーストタイプの使い手であり、ノーマルタイプのポケモンでシャドークローヤシャドーボールを覚えるポケモンは非常に有利とされている。ジムミッションに至っては、安全性の配慮から大幅な変更がされており、ルミナスメイズの森に似たお化け屋敷場になっている。実力は高く、特にゴーストタイプと言う耐久力の低いポケモンが集まるライブの中で高い耐久力を見せるサニゴンは強力』

ホープは、ラテラルタウンの整備された石畳を歩き、1番の観光スポットである遺跡にたどり着く。ここは母親であるソニアが新たな歴史を発見した場所であり、ガラル地方の正しい伝説を明らかにする機会でもあった。

その遺跡はジムリーダーであるビートが当時のローズの手持ちであるダイオウドウを使い、壁面を破壊したことから発見された。この発見の功績と破壊行為が相殺され現在ビートは無罪放免となっている。その裏にはリーグ委員長であるローズが指示をしていたと言う黒い噂もある。

遺跡は非常に丁寧に掃除がなされており、その盾を持ったザマゼンタとよく似たポケモンと、チャンピオンがエースとしてまた切り札として使っているザシアンと言うポケモンによく似ている像があった。

「…すごいな」

改めて父親が伝説のポケモンを使っていると言う事実には感銘を受けたホープであったが、またもやその感動を上塗りする人物がいた。哀愁のネズと呼ばれている人物である。

「おや、また会いましたね」

「ネズさん！」

「すでにラテラルタウンですか。オニオンもダークホースに驚くでしょうね」

ジムチャレンジで半数がカブで脱落することに加え、ジムチャレンジ自体も長期間行われるため、ワイルドエリアで修行する面々もいる。また、ユウリがチャンピオンになってからは、ポケモン道場の一時利用も無料となっているため、ジムチャレンジも長期化している。

その中がかつてのホップにも劣らない速さでのジム突破は上位に入っていた。

「…未だにジムリーダーのクセが抜けてねえですね」

「…」

マリイにジムリーダーを譲った後も、マリイの補佐や経理、その他の雑多な処理を行っていたネズは、懐古し、哀愁のネズと言う名然りという表情を見せる。

「これもなんかの縁ですかね。ホープ。手を出しやんせ」

「ん？こようか？」

「そうね」

ネズは、ホープの手に一つのダークボールを置き、若干の悲しみと期待をホープに渡す。

「…ジムチャレンジのために育てていた子の子供でね。狭いボックスやスパイクタウンに籠りつきりよりもホープ、あなたのもとで広い世界を見て欲しいんですよ」

ホープは、マツスグマを手に入れた。まじまじとボールを見るにネズはゆっくりを踵を返そうとすると、ムゲン団らしき髪型が特徴的な集団がネズの元に歩み寄る。

「ネズさん、ねがいぼしです」

「ん。ご苦労さんです。じゃけん次行きましようね」

袋いっぱい何かを詰めた団員はネズに話しかける。その髪型はスパイクタウンのジムトレーナーの特有の、トゲのようなモヒカンと、キノコのような刈り上げという出立だ。

その袋に同調するように、ホープのカバンのねがいぼしのアクセサリーが揺れた。

「ネズさん、ムゲン団だったんですか？」

2度めの質問をネズに投げかける。

「…ええ。エネルギー事業のために集めてるんですよ。ちようどターフタウン近くに輩がいましたんで、一緒にされたくなくて。あくタイプ使いなんで、多少の嘘はご愛嬌で」

そう言つてネズはすこし肩をすくめ、すこし周りを見ると、ホープに囁く。

「ムゲン団は一枚岩じゃありません。気をつけなさい」

そう言つて、ネズは立ち去る。ムゲン団であるにも関わらず、自身の組織の陰口を叩くような発言をしたホープは、その真意が分からなかった。

しかし、ムゲン団を名乗るチンピラや、ムゲン団に訳ありの人間がいることなどは何か裏があると言うメッセージには十分であった。

・ブラッシータウン

ホープがジムミッションを始めてしばらくがたった夕暮れ、論文の下書きに終わりが見え始めたホップは、一息つくためにスマホロトムを起動し、メールやSNSをチェックする。

あいも変わらず、延々とトピックにあるのはジムチャレンジであるが、公開情報から有力株がピックアップされているのを見る。

自身の息子がそれに上がっていないかと淡い期待を寄せるが、その期待の薄さに対して、ホープは、名前の意味にもあるような活躍を見せていた。

「期待のホープか…フフツ」

期待のホープ、ホープという固有名詞と、新人という意味のホープが合わさったその文字には、ホープがオニオンを撃破する様子が写さ

れている。

ガラルマツスグマという相性が良いポケモンということもあるが、ラストはエースバーンのダイバーンで締めを飾る写真は、かつてのユウリのような勇猛な後ろ姿である。

他にもSNSで拡散されているのは、マツスグマのあくタイプのを振るう動画や、イオルブがひかりのかべを貼ってチーム全体の耐久力を底上げするなどで、ポケモンの相性と特性を考えて行動している様子は父親として嬉しかった。

「さて、俺も頑張るか…」

そう言いかけて、伸びをした時、あまり連絡のなかったネズから着信が入る。

「お久しぶりです。ネズさん」

「おひさしゆう。先程息子さんに会いましたよ。あなたのジムチャレンジを思い出す優秀な子ですね」

「そう言われると恥ずかしいんですが…どうかされましたか？」

悴を開口一番に褒められたホップは鼻をかいて照れる。それを察したネズはすこし間を置き、神妙なトーンで話し始める。

「…ムゲン団ってご存知ですか？」

「ええ、何度かダイマックスエネルギーの文献を工面して貰いましたが…どうかされましたか？」

「最近、ムゲン団もどきのチンピラがいるでしょう？その影で動いている者がいます」

「…とうと？」

「詳しくは分かりませんが、サイトウやメロンさんの言うには、ねがいぼしを使って無限のエネルギーを得るとかなんとか」

その目的にホップは過去に起こった一つの事件を思い出す。ねがいぼしを使い、活性化されたパワースポットと連動させて起こる作られた悪夢。ユウリから教えられたブラックナイトの原理である。

「…ブラックナイトに似ていますね」

「ええ。聞いた話ではまんまブラックナイトなんですね。ねがいぼしを活性化させ、ガラルにエネルギーの枯渇を防ぐ」

「けどそれはムゲンダイナがないと出来ないのでは」

「ええ。なんらかの方法でムゲンダイナの代わりやムゲンダイナを政略的に使えるようにすればできます。特に王族が絡めばいかにチャンピオンといえど、政治には逆らえませぬ。」

しかし、ブラックナイトの先にある恐ろしい計画があるようです」

「それは？」

「過去の干渉です」

「それは…」

過去の改変、無限のエネルギー自体は、全く悪ではなく、むしろ慈善事業をメインとしているムゲン団の性質からローズのような歪んだ執着による実行はないが、そのガラルを恒久の発展に尽くすと言う考えは肯定できた。

しかし、その方法がブラックナイトという危険性のあるのでは、一部反対の立場にいたかったが、過去の改変と聞き、その立場が一気に変動した。

「分かりますか」

「ええ。過去の改変、バタフライエフェクト、この単語だけで何が起こるかくらいは」

過去の改変は、たとえば一つの石を転ばないようにするだけで大きな変更があるとホップは考える。仮に、サイトウがメジャーリーグとして君臨するようにポケモンの鍛え方を変え、本人の知力を本来持てないほどまでにあげられたとして、そこから派生するのは、同じ区画で争っているオニオンがマイナーリーグに移行し、ゴーストタイプの立ち位置が不気味なものとして扱われる。その結果、ロトムスマホに疑念が湧き、結果、ロトムが別の何かに変わる。という未来ができる可能性がある。それが商業的な一部であれば問題ないが、青年一人が配偶者ができる前に死亡した場合、本来の歴史にある、その青年の遺伝子を持った子…この兄弟、孫、未来のひ孫は消滅するという危機があった。

「けどそれがパラレルワールドになる可能性は？」

仮に過去が変わったとして、「変える要因となった人間が未来で生

まれる」前提条件がある上、

「過去を変える人間が存在し、その思考に至る環境で、それを実行する資産と能力を得る」必要がある。つまり、自分の生まれた過去で自分に都合の良い過去に変えることは不可能である。

仮にそれができとして、「過去を変えようとした人間が来た」瞬間に世界線が分岐し、過去は変わらないが、「遠くのどこかの誰か」の未来が変わるだけである。

「セレビィがそれを解決してくれます」

「ときわたり、ですか」

ジムトレーナーや、ポケモン博士は各地方の伝説のポケモンについても知っていることは多い。こと、ガラル地方のような伝説のポケモンがチャンピオンの手で制御されたり、未だに王族制度があるため、他の地方の伝説のポケモンについては周知されている。

「とくにセレビィの存在が重要でしてね。シンオウ地方の神話のディアルガとパルキアの能力から考えると、セレビィが居るだけで、この並行世界の分岐理論が崩壊するんですよ」

セレビィは、未来から時間移動を繰り返し、過去と未来を往来するポケモンであり、ディアルガは時間を操るポケモン、パルキアは空間の間、並行世界を含む境界を操るポケモンである。

「過去へ渡った場合、新たな『未来から来た人』が来たという並行世界が生まれるというわけですか」

セレビィはときわたりという、時間を移動する性質を持つ。仮に、過去を知っている人間が過去にゆくと、並行世界の分岐点が発生するとする。しかし、ディアルガの時間遡行と、パルキアの異空間移動は別種であることから、セレビィのときわたりは、セレビィには、パルキアの並行世界という空間を超える能力はなく、ディアルガの特性と同じ単純な「時間遡行」になる。

つまり、セレビィはパラレルワールドに行くことができず、セレビィが過去と認識する過去しか遡れない。この矛盾により行き着くのは、「セレビィが存在する限り、並行世界には分岐した世界ではなくなる」である。

「ということとはネズさん」

「ええ。セレビイを持ったトレーナーが過去をかえると、それが正しい歴史となるんです」

「けれどセレビイを捕まえるなんて出来るはずが…」

セレビイは常に時間を彷徨っており、統計上最も出現するというウバメの森にも狙って遭遇することは不可能である。

「それが、ガンテツさんから奇妙なことを聞きましたね」

「ガンテツさん？ボール職人の？」

ジョウト地方のモンスターボールに精通した職人、ガンテツの話題が出て困惑する。ガンテツは齢90近くなるが、原料のぼんぐり探しやボール職人としての脳の活性化でいまだに現役の活動家であり、ジムトレーナー専用のポケモンのレベルの上がないボールや研究者用の特殊な条件に耐えるボールの作成を担っている。

「とある不思議な羽を使ったボールを作成したということらしいです」

「そのボールというのは？」

「ジーエスボール、ガンテツさんの直感では、時間をとらえるボールというらしいです」

「時間をとらえる…ときわたり…セレビイの座標をとらえるボールですか？」

「おそらくは、そしてそのボールを依頼した人物は」

・ウバメの森

普段は閑静で麗な森であるが、この日はざわめき、何かを待っているようにも見えた。そのウバメの森にあるとある祠に黒い喪服のよきな服を着た人物が立っていた。

「来なさい、セレビイ」

その人物は祠に摩訶不思議な、単なる道具とも思えない雰囲気をつボールを供える。すると、急にそのボールがその場で起動し、虹色の網が発生し、空気にヒビが入り、その場の景色が壁画が剥がれるように崩れ、見たこともない草原と、真新しい祠、そして本命のセレビイがいた。そこからセレビイはボールに吸い込まれはじめ、ときわたり

をしようと過去への境界を広げようとするも、ジーエスボールの網が伸び、糸のように伝って空間が縫合される。

ついには、セレビィはボールに入り、ボールの中から抵抗するも、ときわたり以外には強力な能力を持たないため、そのままボールに固定される。

「これで私の作る過去は固定される。待っててね。みんな」

どこか懺悔をするようにボールを撫で、セレビィに謝るようにその場を後にする人物は、黒い喪服のような服から移動用のポケモンを繰り出す。

異形の龍がその姿を見せ、主人に頭を下げた。

ラテラルタウン2

ラテラルタウンのジムミッションは、カブのジムミッションと似ており、さながら廃墟の中を探索するようであった。揺れ動く家具を軋む柱等を調べ、肝試しのように何か欠片を集めて行く。そこにはゴースト等のゴーストタイプのポケモンが現れ、勝負を仕掛けてくる。この裏にはジムトレーナーが潜んでおり、ポケモンに勝利するとかけらを渡してくる。

「どつと疲れたぞ」

自分から勇気を出し動く家具や廃墟のきしむ音に対して突き進まなければならぬ性質上、神経をすり減らさなければならぬ。

以前のピンボールのようなアスレチックに近いものからは想像できないものだ。

そして、かけらを集め、完成するのは、サニーゴの亡骸で作ったような仮面である。この仮面は、ジムチャレンジの証拠として、チャレンジしたトレーナーが自分の軌跡として家に飾る。それほどまでに、オニオンにたどり着くトレーナーは少なく、幼くしてジムリーダーとなった相手に負けて、その道を諦める証拠としても意味をなしている。

その覇道を突き抜け、ホープは、オニオンと対峙する。精神的な回復を兼ねて、試合は夜に行われ、仕事帰りの観客が増え、それに合わせてカメラに入り込んだロトムがより多くスタジアムを舞っていた。

「驚きましたか？」

「驚きに行くお化け屋敷なんて聞いてないぞ…」

「ふふふ。僕からしたら可愛いんですけどね。でも、ゴーストタイプはそうなくてはならないんです。ポケモンと身近であればあるほど、その性質に引き寄せられる。だから、ゴーストタイプはあちら側ですから」

「なんでそんなことをわざわざ警告するんだ？」

「僕の次から、さらに厳しい戦いがあります。強いポケモンが欲しくなって、凶暴なポケモンを連れれば、その分ポケモンに振り回される

こともありません。20年経つてもその傾向は変わらない。だから、ぼくが、見極める。失うのは怖いことだから！」

ジムリーダーのオニオンが、勝負を仕掛けてきた。オニオンが繰り出したのは、気球のような紫色のポケモン、フワライドである。

「行くぞー！エースバーン！」

ホープは、ラビフツトの進化系であり、より人型に近づいたエースバーンを繰り出す。そのエースバーンの偉容にオニオンは身震いし、何かを幻視しているようだが、その三日月状の仮面から覗く目をホープへと戻し、向き直る。

「エースバーン！エレキボール！」

「フワライド！たくわえる！」

フワライドの体は一気に膨張し、それを圧縮する。内圧が上がることによって質量が増えたこともあり、ありとあらゆる耐性が1段階上がった。

しかし、素早さに乗じて威力の上がるエレキボールは、エースバーンの特性であるリベロにより、強化されており、受けきるには不十分で、ゆっくりと不時着してゆく。

「エースバーン！ニトロチャージ！」

トレーナー戦は、有利に転がるとそのまま条件を押し続けながら戦うことができる。エースバーンの臀部から太腿にかけて生えた毛が、黄色のストライプから元の燃え盛る赤色に戻る。ニトロチャージによって、全身の発火能力のある毛並みから炎が吹き出し、それを纏ってフワライドに突貫する。

「…」

オニオンが何かを呟いたと同時に、フワライドから影が伸び、エースバーンにつながると同時に、エースバーンがフワライドに着弾し、爆発が起きる。フワライドの特性であるゆうばくであり、エースバーンは、ほのおタイプにはない、爆発による裂傷が刻まれている。

「…けどまだ！」

「いいえ、これで仕切り直しです」

突如としてエースバーンの目が白黒と反転し、そのまま受け身も取

れずに倒れる。

「まさか…」

「そうみちづれです」

ゴーストタイプのほとんどが覚えるという自身の戦闘不能に至る際に、自身に呪いをかけ、わら人形のように呪いの媒体とすることで相手と共倒れする強力な技である。

野生では、そのままお互いを黄泉に連れ去るが、もともと黄泉とのつながりが強いゴーストタイプはそこから帰還できる。しかし、モンスターボールにより、肉体が滅ぶ前にボールに、保管されるためバトルでも使用可能となっている。

「ごめんな、エースバーン。行くぞー！マツスグマー！」

「いって、サニゴーン」

ネズの見た目のようにパンクな姿をしたマツスグマは、その見た目の狡猾な鳴き声を上げ、目の前の亡霊が形を持っているようなサニゴーンに威嚇をする。

「マツスグマー！したでなめる！」

「サニゴーン、ちからをすいとる」

マツスグマは長く尖った舌をサニゴーンに当て、潜在的な捕食の恐怖を与えるが、触れたサニゴーンから何かを吸われたように尖った舌が弛緩してゆく。

そして、触れた実体の表皮が剥がれ、先ほどまでの呪いの置物のような佇まいから、幽霊然りと言った、さまよう速さを手に入れる。

「くだけのよろいか！クソ！マツスグマー！バークアウト！」

「止まらないよ、のろい！」

悪意の波動と雄叫びをマツスグマは発し、警戒するがその死角からサニゴーンが忍び寄り、どす黒いオーラを当てる。

「続けてちからをすいとる」

マツスグマのありとあらゆる筋力から生命力が奪われ、その鋭利な爪は杖の代わりと成り下がり、威嚇のために出した舌は息切れによるものへと変わる。

「交代だ！行け！イオルブ！」

ホープの手持ちである、レドームシから進化したイオルブは、エスパタイプであり、ゴーストタイプの使い手であるオニオンと相性が悪かった。しかし、攻略の要であるマッスグマを失うわけにはいかず、捨て銀のような戦法でイオルブを繰り返す。

「サニゴーン、げんしのちからー!」

「たえろ!イオルブ!」

レドームシの堅牢さを有するイオルブは、その分速さが足りない。そのため、サニゴーンによって発射された謎の力を持った砕けた外皮がその表皮に激突する。

「イオルブ!ミラーコート!」

レドームシの外皮を削った外皮は、そのままさらに砕けるが、そこに混ざったイオルブの外皮から発せられたガラス片の煌めき当てられ、威力を増してサニゴーンに襲いかかる。

ストーンエッジなどの直線的な軌道を描くものとは違い、サイコパワーによって制御された破片がサニゴーンを追い、その実態のない体にげんしのちからによるパワーとかさ増しされたミラーコートのエネルギーを受け、サニゴーンは倒れる。

「ありがとう。サニゴーン」

オニオンはサニゴーンをボールに戻し、最後のボールに手をかける。その手は震えており、元の気弱そうな少年を知っていれば、恐怖に震えていると思えた。しかし、今の青年の目には、明らかな遺されたものの闘志が宿っていた。

「何度も経験しても慣れない…」

けど、寂しくはない!

まだ最後の1匹だ!

ゲンガー!キョダイマックス!

全てを闇に!包み込んで!

オニオンのダイマックスバンドが反応し、ゲンガーのボールが巨大化する。オニオンはそれを大きく振りかぶり、両手で投げる。

巨大化したゲンガーは大きな口をさらに大きくし、大きな洞窟のよ
うに構える。

「キョダイゲンエイ！誰も逃がさない！誰にも止まらせない！」

その埒外のスピードで、元のゲンガーの影が地面からイオルブの身
体を通り抜け、生命エネルギーを奪う。ゲンガーの影が通るたび、イ
オルブは縫われるように地面に引き摺り込まれ、そのまま気絶する。

「…まだまだ！いけ！ルンパツパ！」

「まだまだ行くよ！ダイアシッド！」

「バブルこうせんで迎え撃て！」

ゲンガーから放たれる螺旋状の毒液がルンパツパを襲い、ルンパツ
パはそれを大量の泡沫を放射し、相殺を試みる。しかし、キョダイ
マックスと通常のポケモンでは分が悪く、徐々に泡沫が減り、毒液の
飛沫がルンパツパをかすめる。そのダメージによる隙がゲンガーの
好機となり、毒液で押し切り、ルンパツパの全身を毒液で濡らす。

しかし、直撃は免れたルンパツパは、ギリギリのところで踏みとど
まる。

「ゲンガー！ダイアーク！」

「ルンパツパ！マッドショット！」

ルンパツパは最後の力を振り絞り、ゲンガーの広範囲に展開された
悪意の波動を受けながらも大きくなった目の近くにドロの塊を吐き
出し、ぶつける。ゲンガーは短い手を使って目を擦りながら元の大き
さに戻り、ルンパツパはそのまま精魂尽きて倒れる。

「最後だ！いけ！マックスグマ！」

手負いのマックスグマが現れる。先ほど奪われた生命力は休んだこ
とにより回復し、呪いもボールに保護されたことにより、技の範囲か
ら外れている。しかし、先ほど呪いにより削られた精力はなく、肉体
よりも精神にダメージを負っていた。

「マックスグマ！ダイマックス！」

しかし、相手のゲンガーも手負いであり、一方はキョダイマックス
が切れ、一方はダイマックスしているという先ほどとは逆の関係がで
きていた。

「マツスグマ！ダイアーク！」

「…ゲンガー…、ゲンガー！ドレイパンチ！」

一瞬敗北を悟ったオニオンであるが、ゲンガーの瞳を見て、再び向き直り、指示を出す。ゲンガーはダイアークによる悪意のオーラが詰まった尻尾の横薙ぎに正面から拳を振りかぶり、衝突する。

オーラを纏った拳と悪意の波動がぶつかり合い、突風を巻き起こし、観客は目を守る。

スタジアムの観客が再びスタジアムに視線を戻した先には、倒れたゲンガーがおり、マツスグマはいなかった。

「まさか、この戦いで進化するとは」

ホープの前には、より強靱で、二足歩行を可能にした筋肉をもち、面影を残しながらも、より残忍な顔立ちに変化したマツスグマ、もといタチフサグマが立っていた。

観客の競争の中でタチフサグマはホープに向かって悠然にポーズを決め、一鳴きした。

・ジム控え室

試合を終えた二人は、ダイアシッドによって変色したユニフォームを脱ぎ、私服に着替えていた。

「お疲れ様です。どうでした？ジムミッションは。…いえ、趣味が悪いとは分かっています」

「そんなことはないぞ！ゴーストタイプらしかったし、ポケモンに変な慣れがあったのもわかったし！」

不意にマイナス思考に陥っているオニオンにホープは素直な感想を話す。

「ありがとうございます」

そして、ホープの顔に何かを感じたのかポツリポツリと話し出す。儂げな青年の体は細くとも鍛えられており、ホープよりも少し身長が高い程度ということもあって、まるで、同年代にも見えた。

「今のラテラルのジムにいるトレーナーは若いんですけど、ポケモンは玄人で、前のトレーナーの後を引きずってる。だから、せめて彼らがお互いがやりやすいようにしかできなかった」

ホープが思い返すと、かけらを渡すジムトレーナーはどれも若かった。

「どうして悩みを俺に…」

そう言いかけて、ホープはオニオンがダンデがチャンピオン時代からのジムトレーナーということを思い出し、なんとなく、顔立ちがダンデに似ていたためという理由だと察した。

「…かつてのチャレンジャーだった、何かを大きく変えるような目をしたチャンピオンに似ていた、ではダメですか？」

その言葉にホープは意表を突かれ、呆然とする。今までは、ホップ・ソニアの子ということで、幼い頃からホップ兄弟やソニアと似ている部分があると、それを言われることは多々あったが、チャンピオンに似ているという言葉はなかった。

「俺が、チャンピオンと」

「とは言っても、いまのチャンピオンとは違いますよ。今のチャンピオンは…」

「!!」

「いえ、やめておきます」

オニオンはそそくさと控え室を出てゆく。その様子を見て、ユウリの、グローリアの受難の一部を垣間見た。頭の中ではオニオンが言いかけた言葉が補完され、何度も反芻される。

『今のチャンピオンは、全てをねじ伏せてしまう』

チャンピオンは固定の手持ちを持たない。近年ではかつての象徴であったザシアンをパーティに入れず、伝説頼りという言葉をねじ伏せ、進化途中や進化先を持たないポケモンを使い、強いポケモン頼りという言葉をねじ伏せ、ある時はニヤースとヨクバリスだけで不敗を守った。

『不敗の女王』『すべての強さを持ったもの』『無慈悲な強さ』等、彼女を称え、畏れる声も多い。実際に、父親であるホップでさえ、必ず負けるというほどに強いと聞かされた。

「…尚更、勝ちたくなってきたな!」

このジムチャレンジで今、ホープのほかに最も志高いものの目標は

「チャンピオンと善戦すること」であり、半ばチャンピオンを倒すと息巻いていた者はカブで止まっていた。

ホープ自身もバトルするうちに、最初は焦らずに勝てた。しかし、徐々に苦戦が増え、オニオンとの勝負も客観的に見れば、ダイマックスを残しての勝利だったが、ルンパツパを中継にするとという勧められた行為ではない判断での勝利だった。

しかし、ホープの意思はいまだに強く残っている。

ホープは回復させたイオルブをボールから出す。

「次のジムまでにワイルドエリアで特訓するぞー！」

拳を突き出すホープに、イオルブは短い節足で応える。

ワイルドエリア

ワイルドエリア編

ジムチャレンジ期間におけるワイルドエリアは、バッジの数によって登録されたエリアのみが立ち入りできるようになっていた。一方で立ち入りできないと認識された箇所からは、スマホロトムによる警告と近隣に配置されたジムトレーナーたちがすぐさま駆けつけるものである。

オニオンとの戦いでジムバッジを4つ手に入れたホープは、ワイルドエリアの新たな箇所へ立ち入った。

それまでは人の手が若干入っていたため、珍しいポケモンは少ないがある程度ジムトレーナーと戦うには充分強いポケモンがいた。しかし解放された箇所からは既に生々しい破壊光線の跡や、縄張り争いの後であろう乾ききつていない血が地面についていた。

ホープは警戒のためにイオルブをボールから出し、警戒に当てていた。そのイオルブがかつてない危機を察知したのかホープを引っ張ってその場から逃げようとする。

「どうしたイオルブ：うわあああああ！」

後ろからバンギラスが走ってきたのだ。ジムバッジの数で管理されているとは言え自然界は簡単に人が立ち入るものではなく、往々に強いポケモンが跋扈している。

特にバンギラスを始めとするポケモンは縄張りを広げることが目的と言うこともあり、実力が伴わないトレーナーが被害に遭うと言うことも少なくない。

特にバンギラスは縄張り意識が強く、敢えて自身の戦いの痕を残し、マーキングとする。地面タイプであるがゆえに発汗機能が乏しく、表皮もサナギラスを経ているため、エナメル質でコーティングされているからだ。

そのため、砂漠などの水分補給の手段が乏しい環境で生き残れる反面、糞尿の頻度も少なくマーキングが自身の破壊痕となる。ホープが見た戦いの痕は、丁度縄張りを広げて活気立っている場面であった。

「うわあああああ！イオルブ！サイコキネシスで俺たちを軽くして摩擦を少なくするんだ！」

ホープはイオルブを背中に張り付かせ、強力なねんりきによって重力と摩擦を軽減させる。人間とは思えない速度での疾走を可能にして逃走を試みるが、子供の身体能力であるホープは徐々に迫られる。

幸いにも、はかいこうせんは、自身の生命エネルギーを単純な熱と光に変換して発射するため、リチャージに時間がかかり、バンギラスはホープにはかいこうせんは発射してこない。しかし、獰猛に光る目で辺りを破壊しながら追いかけていることから、あばれるによって身体能力をさらに引き上げているのがわかった。

（ルンパツパは雨が降ってないとこの速さについて来れないし、ラビフットは耐えきれない！タチフサグマは進化したばかりで体に慣れてないからブロッキングが未完成だしどうすれば）

岩タイプであるバンギラスにとって有能なのはラビフットののどげり、ルンパツパのバブルこうせんだが、圧倒的なレベル差では威嚇程度にしかならないと判断し、逃げに徹する。

「ブリムオン、マジカルシャインです」

何処からか透き通った声が発せられ、バンギラスに向かって眩い閃光が発射される。その光線によってバンギラスはその暴走を止められ、地面に倒れる。

「…毎年のことながらジムチャレンジャーにワイルドエリアを散策させるのは危険ですね。エリートに僕みたいなのでなければ」

傲慢なセリフとともに、濃い紫のコートを羽織り、フェアリージムのユニフォームを着た細身の青年が、息を切らすホープの前に歩み寄る。

「どうぞ、おいしいみずです。ポケモンを担いで逃げる姿は中々ピンクでしたよ」

ピンクとは、と言葉が出かけるが、助けられた恩人にそんなことは言えず、ホープは渡されるペットボトルを開けて片手に水を溜め、イオルブの皿代わりにして自分も水を飲む。

「プハア。助かりました」

「いえ、これも仕事ですから」

ぶつきらぼうに見えるが、よくよく見ると、若干誇らしげであり、彼なりの「気にするな」という言葉であるとわかるとともに、嬉しがつているのが見て取れた。

「というと、ジムリーダーですか？」

「ええ、アラベスクタウンの、ジムリーダーの中で最もピンクで有名なビートです」

ピンクという単語に哲学を感じ始めたホープに対し、ビートは一つ咳払いと注意喚起をして、ホープに向き直る。

「ジムで待っていますよ」

そう言ってアーマーガアタクシーを呼び、それに乗り、アラベスクタウンの方向へ過ぎ去ってゆく。

アーマーガアタクシーに乗ったビートは、ホープの表情を思い出し、かつてのホップの面影を見るが、まったく別物の感情を有していることがわかった。

「漠然と妄信的に兄を追っていた父親よりは中々いい目をしていましたね。ちよつと意地悪なクイズを出したくなってしまうました」

オニオンにポケモンとの距離を正す意向があるように、アラベスクタウンはポケモントレーナーとして、人としてのあり方を示す意向がある。ポプラはそれを、知識、自分と戦ったものへの敬意、想像力、相手への下調べ、マナーと気遣いの5つの質問で計っていたが、ビートは元来の処理能力の高さからチャレンジャー、一人一人に合わせて質問を作っている。

「そういえば今日はユウリもワイルドエリアに来ていましたね」

チャンピオンと直であったチャレンジャーがどのような反応をするか意地悪そうな笑みを浮かべてビートは帰路に着く。

一方、ワイルドエリアの中でも比較的凶暴なポケモンが少ない場所にユウリはいた。手持ちは既に固定されているため、ポケモンを捕まえるためでも、チャレンジャーへのファンサービスをするためでもなく、ただ、呆然とテントを張って、普通の人間ならば飲みきれないような濃さのコーヒーを啜っていた。

その瞳は完全に濁っており、覇気すらも感じられない。格好は、マスコミやファンから逃れるために変装したグローリアの姿である。

「今年も失敗か」

ホープがオニオンとバトルしている間、チャンピオンとキバナのエキシビジョンバトルが行われていた。

「キバナさんもなんかゆるくなった」

キバナの手持ちはファイナルトーナメントに近い、コータス、グリムガン、フライゴン、ヌメルゴン、ジュラルドンであったが、その全てをガラルヤドランで対応してしまつたため、今の手持ち情報が公開されないままとなつてしまつた。

ダンデがチャンピオンの時は、善戦し、ファイナルトーナメントで対策し、ギリギリの戦いをするというものであつたが、ガラルヤドランしか公開できなかつた。

「本当に、劣化しかない」

チャンピオンとして、リーグの劣化に怒りがふつふつと湧いてくる。5年目はまだ「勝つてしまつたら、ローズ委員長の爪痕を直させて、自分の見せ場のためのお膳立てさせただけになるな」くらいの気概があつたが、10年でチャンピオンを目指さなくなるメジャーリーグが増え、15年ではチャンピオンという枠が目指すものから外され、今ではチャンピオンという選択肢が稀になつていた。

それが顕著なのがキバナである。キバナは20年来のファンを多くを持っており、資産だけでいえば、少し派手に生活しても遺産が残せる程度にはある。覇気が少なく、それをキャラクターによつて悟らせないようになっている。

かつてのキバナを知る面々からは、なんとなく、原因を察しているため、チャンピオンの手前叱咤出来なかつた。

「やっぱり私がいなかつた方が」

キバナの生涯のライバルはダンデであり、チャンピオンではなくなつた瞬間、キバナの目標が喪失した。ダンデの強さは折り紙付きであり、ユウリがダンデをファイナルトーナメントに招待するたび、接戦を繰り広げていたが、そのたびにダンデはユウリに蹴落とされ、目

標の最高峰としていたダンデが2番目になったことから、キバナは燃え尽きてしまった。

「…」

燃え尽きたトップジムリーダーよりも弱いジムリーダーしかないないリーグを興行として成功させるため、ユウリは固定メンバーで常に戦いに勝利することはせず、常にエキシビジョンマッチでメンバーを見せ、対策を取らせ、変化で観客を沸かせ、有利タイプのジムリーダーに期待の目を見せていたが、この頃は最初の1匹を見せるだけにとどまっている。

「っ…ヤドラン、いやしのはどう」

これからのメジャーリーグやその他の大量の問題を考えると、陰鬱な気分になり、吐き気に襲われる。常となったヤドランによるいやしのはどうで治療するが、気分の回復は芳しくない。

肉体が成長しないことと、チャンピオンという激務から専属の医療チームが存在するが、肉体が成長しないことよりも深刻と診断されたのが、精神の消耗である。現状、抗鬱成分が高い薬品は肉体年齢が10代前半ということと、チャンピオン本人の副作用による体型の崩壊を懸念し、いやしのはどうを使うことが決められた。

しかし、ルカリオやサーナイトと言った、相手の心やオーラまで読む上に人間に近い知能を持つポケモンはいやしのはどうを使う前に、ユウリを気遣い、仕事そのものを妨害する。そのため、ヤドランのよくなあくまでトレーナーの心配はするが、きのみをあげる程度しかないポケモンが抜擢された。

それでも根本的な解決にはならないため、こうして自然の中にいることにより気晴らしを行っていた。

「そこにいるのはグローリアじゃないか？」

ふとその言葉の方向に向くと、ホープがいた。靴は泥まみれであり、はねた泥がズボンに付いている。おおよそワイルドエリアでバトルを繰り返したとわかる軽い怪我をつけていた。

「久しぶりね。ホープ」

ホープと合流してから、ユウリはグローリアとしてホープの近況を

聞く。オニオンとの接戦の途中で、イオルブを時間稼ぎのように使ってしまったことを悔いているようだった。

「どうしても勝てない時、取り返しがつかない時は、そうするしかないと思う」

「そうなのか…でもやっぱり相棒には活躍してほしいぞ」

そう言っつてイオルブの頭を撫で、ホープはしばらく話し込んだ後、グローリアのコップに目がゆく。

「おれも一口貰ってもいいかな？」

「いいよ。でもだいたい濃いけど…」

「大丈夫！父さんも濃いコーヒー作るけどうまかったぞ！」

研究者特有の忙しさを、カフェインによる覚醒のために生み出されるエスプレッソよりも少し濃いコーヒーを渡す。

魔法瓶から注がれる炭を溶かして練ったような濃さと、コーヒーメーカーの中にいるような濃密な匂いがホープの鼻腔をくすぐる。

「…これ、うまいのか？」

「？…これぐらいじゃないと味がわからないでしょ？」

ガラル地方の料理は基本的にカレーが出された料理に自分で酢や塩で味をつける方法がメインである。そのため、濃い味に慣れすぎた人間もいるが、病的なまでの味覚音痴はいない。加えて、ホップからの情報で、かつて共にホップが食べたフルーツの多い甘いカレーのレシピを得たが、ごくごく一般人の味覚に合わせたものだった。

つまり、ユウリは確実に味覚障害を患っており、その理由が、チャンピオンになって以降であると分かる。

ホープは、そのコールドタールのようなコーヒーを舌先で少し舐める。激しい苦味と舌を刺すような刺激が伝わり、眉間にシワを寄せせる。それを何でもないように、アメリカンコーヒーを飲むようなスピードで飲み込むユウリを見る。

「チャンピオンって大変なんだな」

「…」

ふとグローリアではなく、ユウリを心配する言葉を出してしまい、慌てて口を塞ごうとするが、グローリアの、ユウリの見開いた目を見

て硬直してしまう。

明らかに動揺した表情の後に、すべてを諦めたような優しさを含んだような切なそうな顔を見せる。

「…ごめんなさい。騙していて」

「い、いやーそんなことないぞ！チャンピオンだとしがらみも多いだろうし仕方ないと思うぞ！」

「…」

その言葉がどこか琴線に触れたのか、表情を変えることなく、涙が先行したように、ユウリの瞳から大粒の涙が溢れ出る。

「ご、ごめん！なんか変なこと言ったか?！」

「…うん。嬉しい、の、かもしれない」

チャンピオンの重圧の中、かけられる言葉は称賛、畏怖、嫉妬のどれかであるが、心配をする人間はいない。ジムリーダーでさえも、会食の時、タバスコを一瓶使い切るようなペースで食物にかけるユウリに、何も言わなかった。それは、何かの拍子に、爆発しそうで危うかったことが大きい。ビートであれば違ったが、第二の育て親であるポプラの介護のために接点は少ない。

メディアの露出も、完璧なチャンピオン、女帝のイメージとそつなくこなす姿から、労働時間に疑問を持つても、『チャンピオンなら大丈夫』という悪意に近い固定観念があった。

その中でかけられる言葉は、ユウリにとって砂漠の中のオアシスのようなものである。

「そ、そうだ！もうすぐ夜だしカレー作らないか！」

「…ありがとう。手伝いは何を」

「俺が全部するから待っててくれ！サツチムシとヒバニーと出会わせてくれたお礼がしたいんだ！」

「…うん」

意外にもあっさり自身と自身の正体がバレ、その上で認めてくれたホープに張り詰めた感情をとかれ、そのまま溶けた化粧を直しながらユウリはカレーの作られるのを待つ。

ちびちびと飲むコーヒーはいつもよりも濃く感じられ、本来の苦味が感じれた。

「できたぞー！トッピングは好みに分かれるからつけなかったぞー！」

しばらく待つて出てきたカレーはスタンダードなサフランライスに粘性の高い小麦粉によるトロミの付いたカレーである。絵に描いたようなカレーライスに破顔しながら、自信満々の表情を浮かべるホープの前で、サジを取る。

「いただきます」

お互いに挨拶して、カレーを頬張る。髪が垂れるのを手で押さえる姿に色気を感じたホープは米粒を少し落としながら口に入れ、それに気づかないユウリは先ほどよりは敏感になった舌で真心の味を探る。

「！」

「どうだ？うちの秘伝のレシピ」

その味は思い出とともに薄まってはいたが、それでも今の鈍感な味蕾でもその味と全く同じと判断できた。

それがソニアの作ったカレーと全く同じならばこそそのものであった。

「…うん、美味しいよ」

「濃い目に作っておいてよかったぞー！」

そう言うて自身はライスを多めにしたカレーを食べながら、相槌を打つ。声が震えていないか不安になっているユウリに対して、万遍の笑みを浮かべるホープの害意のなさに一層心の中にある思い出が刺激され、喉からこみ上げるものがあつた。

濃い味が故に、ホップとともに食べた自分の好みである甘いカレーではなく、ソニアのレシピを美味そうに摂食するホープに対して、かつてのホップを想起し、動悸が起こる。

徐々に味を感じなくなるのをごまかすために急ぎ目に食べ終わり、洗い流すようにコーヒーを啜る。

「ありがとう、ちよつと仕事があるから行くね」

「ん？そうなのか！お疲れ様だぞー！」

ユウリは、ボールからアップリューを繰り出しそのままアップ

リユースの下半身に手をかける。

小さい体からは想像できない豪風を羽ばたきによつて生み出すアップリユースは、そのまま一直線にユウリとともにエンジンシティの方角に飛び立つ。そのジェット機のような姿に、チャンピオンのポケモン然とした強さと風で揺らめく髪と服に憧憬をホープは感じた。

その後ろ姿を見せるユウリの瞳にある、何か決意を固めたような表情と頬を伝う涙をアップリユースは悲しそうな目で見た。

アラベスクタウン

ルミナスメイズの森は大樹が何本も連なり、昼夜を問わず、ほとんど光が入らない。しかし、その中でも発光するキノコ類や、人為的に作られた微弱な光を放つ通路が人の行き来を補助していた。

かつては手放しで出来ていた獣道は、同時期に前ジムリーダーポプラが新ジムリーダーのビートの就任祝いとして、ポケモンへの過干渉を防ぐために私財を使って優美な石畳とスロープが作られていた。

公共事業への寄付には、賞賛が集められたが、一方で相続人がおらず、ビートが自身の遺産で墮落しないようにと先んじて消費したとも言われている。

そのやけに優しいピンクと淡い緑で作られた柵に手を置きながら、ホープは探索していた。この不思議な空間は、ミストフィールドやサイコフィールドと似た波長が飛んでいるという噂もあり、エスパー、フェアリータイプのポケモンが多く棲息している。

ホープはそれを写真に撮りながら幻想的な雰囲気浸っている。「キュワワーにクレツファイもいるな。父さんが昔とは違うって言うってたけど、フェアリータイプがいても不思議じゃないと思うんだけどな」

「それが不思議なことなんですよ」

ふと、呟いた言葉に反応するものがおり、驚いて振り返る。そこには、先日救助してもらったビートがいた。

「ビートさん！不思議なことってどういうことですか？」

「キュワワーは本来、花をつけて行動します。美しい花は日光が燦々と輝く場所で虫ポケモンを誘導するのですが、薄暗いルミナスメイズの森では不適です。」

それに、クレツファイは金属を食す上に鍵が好みなので、人家や鉱山近くに棲息します」

「へえーそうなのか！じゃあなんでここに？」

「かつてチャンピオンがヨロイジマという場所で修行したことが有名となり、そこに住んでいたポケモンが本土に持ち込まれたのが通説で

すね」

「ヨロイジマ？」

「ええ。二代前のチャンピオンが購入した無人島です。今はジムスタジアム付のワイルドエリアのようなものです」

「そうなのか！けどわざわざ持ち込むなんて、迷惑な話だな！」

「…迷惑な人は後先を考えませんからね」

この言葉にどこか物悲しさを感じる口調で話すビートは、一頻りの解説が終わると、ジムの方向に戻る。一瞬、歩幅が異様に短く、誰かに付き添うような歩き方をするが、すぐに戻りいつものキリキリとした調子に戻る。

アラベスクタウンは、かつての森の中に家が生えているような幻想的な空間を残しつつも、一部ビニールに覆われた電線などがあり、それが時間の経過とインフラ整備の痕跡を感じさせられた。

またジムリーダーの居城であるスタジアムには外壁に多数の室外機のようなものが付けられておりクリスティーが存在し得る理由ともなっていた。

『アラベスクタウンとビート：森の中に存在する発光する菌類や様々な白植物に覆われ大変幻想的な雰囲気を残すこの街で鎮座するジムリーダー。』

長年後継者のいなかったポプラに代わって、ジムチャレンジ期間中にジムリーダーへの転身した異例のジムリーダー。

ジムミッションの後に待ち構えるジムリーダー戦では、2択問題を出题する。ポプラとは違い、より知識と意思が答えに影響する。理不尽さはないが前ジムリーダーの方が優しいと言われることもしばしばあるクイズを出題する。答えによっては恩恵もあると噂。

50年以上ジムリーダーを務めた前ジムリーダーであるポプラと比べられることが多く、本人はむしろ比べて見せろと言わんばかりの個性を放っている。

前任と比較されやすいジムリーダーの中で、比較されることを望むと言う珍しいタイプの性格。

元チャンピオンの時にしてガラルの遺跡の破壊と新たな歴史の発

見と言う良い意味でも悪い意味でも大きな爪痕を残した人物。

その生き方もまたドラマティックである』

ホープは、そのタウンマップに掲載された一文を読み、先程の後先考えないというセリフが自身を揶揄していると察する。

(ガラルにも人にも歴史があるんだな)

ホープはその足で、ジムチャレンジの受付を済ませ、ジム内に到る。ジムは往來の姿を残しているが、ポプラと同様に自身が劇場に立ち、反対の幕から現れるトレーナーたちと観客席風に作られたチャレンジャー側と戦うというものである。

『ジムミッショョン、チャレンジャー、ホープ、開幕まで、3. 2. 1...』
ただし、ポプラと違う点は、クイズが出されるのがビートとの戦いのみであり、ジムミッショョンは単なるバトルだけである。

しかし、そのバトルは非常に特殊であり、とある地方の群れバトルにインスピレーションを受けたとして認識されている。

「いくぞー！ユニラン！」

「いって！ポニータ！」

「が、頑張つて…ラルトス」

「虎の子だ！ポニータ！」

「俺だつて！ラルトス！」

『社会福祉法人、ドレディアのカゴより、園児の皆様との対戦です』
アナウンスが流れ、一斉に飛び出したユニフォームを着た幼児たちがポケモンを繰り出す。

ジムトレーナーと言う名の職業体験に来た福祉施設の子供たちが一斉にポケモンを繰り出してバトルすると言うものである。

平均レベルは低いが数の暴力のようなまたは学芸会のような印象を受けた。

「いくぞー！ルンパッパ！なみのり！」

ルンパッパの口から、その体積を超えた水が高圧で噴射され、大きな波を作る。水を吐き続けるルンパッパは頭部の傘のような器官をビート板のように吐く水の上に乗れ、ポケモンを洗い流す。

群れバトルの特徴は、相手への全体攻撃系の技があれば、比較的容

易に突破出来ることである。素早さが高く、なみのりをタイプ一致で当てるルンパツパはこのジムに最適であった。

少年たちのポケモンを一気に戦闘不能にしてゆき、少年たちはルンパツパの活躍に驚き、あるいは悔しがりながら劇場を去る。

『続きまして、株式会社マクロコスモスチャイルドサポート運営、レンメン幼稚園の児童の皆様です』

次々と繰り出されるポケモンは、いずれも可愛らしい姿をした、フェアリージムにふさわしいものであり、イーブイやヌイコグマなどのノーマルタイプのポケモンも混じっていた。

ホープは既に攻略法を見つけており、ルンパツパの波乗りにより、一気に勝利を重ねる。

『最後に、一般社団法人ムゲン団運営、おやどりのこえの皆様です』
最後というアナウンスとともに、現れたのはフェアリージムのユニフォームに、何かを掴むようなマークのネックレスをつけた少年たちが現れ、ボールから色とりどりの飾り付けたクリームの体を持つポケモン、マホイップを繰り出す。

「ルンパツパー！なみのり！」

ホープの本気の声色に、ルンパツパは首から下げた滴型のネックレスをきらめかせ、特大の波乗りを繰り出し、マホイップたちの目を回した。

・ジムリーダー：ビート

スタジアムは辺境の地であるにもかかわらず観客が溢れんばかりにその試合を見守っていた。エンジンシティで5割のチャレンジャーが消えると言うだけあって、残った猛者たちの繰り広げる試合は、たとえジムリーダーがジムチャレンジ用のポケモンで戦っているとはいえ、群衆にとっては非常に見応えのあるものである。

その歓声の中でビートとホープは対峙していた。フェアリージムらしいピンクのユニフォームに硬質なプロテクターのついた下着は線の細いビートに凹凸のメリハリをつけている。

「本来はもつと時間のかかる予定でしたが、流星はホープというだけ

はありますね」

「へへ、ルンパツパがいたからな！」

「ですがこれからは一筋縄では行きませんよ？」

「ああー！」

お互いにボールを構え、それぞれがポケモンを繰り出す。

「出番ですよ！クレツファイ！」

「いけ！エースバーン！」

鍵束を飾る金属質のポケモンであるクレツファイとエースバーンが対峙する。

「フェアリージムの真骨頂！トレーナーの実力も試すクイズの時間ですー！」

「やっぱり来たか！」

「第一問！ルミナスメイズの森に住むヨロイジマから来たポケモンは？クレツファイ、キュワワーどっち？」

「…！クレツファイ！」

「これは常識ですね、正解です！」

ビートの正解という言葉とともにスタジアムの天井に生茂る巨大なキノコが揺れ、エースバーンに胞子が降りかかる。

その胞子は、エースバーンの周りに滞留し、輝く。エースバーンはそれに刺激されたのか、動きのテンポが速くなり、素早さが一段階上昇したように見えた。

「エースバーン！かえんボール！」

動きの早くなった足腰でリズム良く発火性の高い毛並みに小石を潜らせ、火の玉を形成し、それをクレツファイに向かって蹴りつける。

鋼タイプであるクレツファイはそれに直撃し、手持ちのお気入りの鍵共々熱気を放ちながら倒れる。

「ゆっくり休みなさいクレツファイ。次です！ギャロップ！」

薄紫と薄緑の立髪を揺らし、筋肉の発達した真っ白な体を持つガラル地方特有の変化を遂げたギャロップが繰り出される。

「問題！前ジムリーダーのエースポケモンはマホイップ？それともブリムオン？」

「俺が生まれるよりも前に引退したジムリーダーのエースなんてわかるわけないだろ！ブリムオン！」

「過去があつて今があるんですよ、不正解です」

ビートの言葉とともにキノコが揺れ、綿毛のような孢子が大量にエースバーンに降りかかり、エースバーンの視界を奪う。

「ギャロップ！メガホーン！」

頭の角をエースバーン目掛けて一直線に向かう。メガホーンは一点集中の大技であり、回避されることも多いが、視界の狭まったエースバーンには距離が測れなかった。

ホープは剛速でエースバーンに向かうギャロップが迫る直前に指しをだす。

「エースバーン！右にジャンプ！」

エースバーンの視界の代わりに、ホープは避ける道を示す。エースバーンはそれに則り移動しようとするが、急に脚が痙攣し、体が痺れたように動かなくなる。

「まさか！」

「番外クイズ！クレツファイが放っていた技は?!」

でんじはという単語がホープの頭をよぎったのと同時にエースバーンに渾身のメガホーンが放たれ、エースバーンの体は宙に浮き、そのままスタジアムの壁に激突する。

「くっ…特性いたずらところとでんじはか？」

「正解ですよ。とは言っても番外なので何もあげませんが」

「まだだ！いけ！ルンパツパ！ハイドロポンプ！」

「ギャロップ！サイコカッター！」

ジムミツションで活躍したルンパツパが姿を現し、そのまま高圧の水流をギャロップに向かって吐き出す。対するギャロップのツノが光り、頭を振り回すことで光の刃が発散され、ルンパツパの口から放たれる水圧と相殺し合う。

「押し切れ！ルンパツパ！」

ホープの声に答え、ルンパツパは、より必死の形相で水を放射しサイコカッターを明後日の方向にそらし、ギャロップを水流におぼれさ

せる。放水が止まり、水の跡には鬣を芯から濡らして倒れるギャロツプがいた。

フェアリーポケモンの中でも攻守に優れたギャロツプが倒されたことにより、会場のボルテージは上がってゆく。

「お疲れ様です、ギャロツプ。行きなさい！サーナイト！」

ドレスを纏ったような優美な人形のポケモン、サーナイトが現れ、ビートは高らかに次の問題を出題する。

「問題！現チャンピオンの通り名は？無敗の女王？無限の女王？」

「簡単だぞ！無敗の女王だ！」

「あなたには少し優しすぎましたかね！正解ですよ！」

再びキノコから胞子が舞い、ルンパツパの頭のさらに積もる。それがルンパツパの粘膜から吸収され、ルンパツパの血色がより良くなり、闘志に燃えた瞳にかえる。

「ルンパツパー！ハイドロポンプ！」

「サーナイト！サイコキネシス！」

ルンパツパのハイドロポンプをサーナイトがサイコキネシスによってねじ曲げる。それに抵抗してルンパツパは放水の威力を高め、スタジアムを水流が蛇のようにうねり、這いずり回る。

連続のハイドロポンプによってルンパツパの意識が途切れ放水が止まり、その反動で弾かれたサーナイトの操作するサイコエネルギーを纏ったハイドロポンプが暴走にお互いを丸呑みする。

「サーナイト！」

「ルンパツパー！」

水流が天井近くまで届き、きのこの裏に控えていたギモータチが見守る中で水が霧散し、2体のポケモンが落下する。

お互いに先ほどの攻防で気力が完全に抜けており、両者が地面にいたときには目を回していた。

「よくやりました、サーナイト」

「快進撃だったぞ！ルンパツパー！」

お互いがボールにポケモンを戻し、ビートは最後のポケモンを、ホープは残り2体のうちから1体を選ぶ。

会場は申請された数により、ホープが一体多くポケモンを残してジムリーダーを追い詰めたということもあり、盛り上がりがさらに加速していく。

「数の有利があると思って、勝ったと思わない方がいいですよ。トリを務めなさい！ブリムオン！」

「行くぞ！イオルブ！」

ホープの旧来の相棒であるイオルブが繰り出されるのと同時に、怪しげな薄ら笑いを浮かべる魔女を想起させるシルエットのポケモンであり、ホープをワイルドエリアで助けたものとほぼ同じ姿のブリムオンが姿を見せる。

「連綿たるピンクを見せてあげましょう！ブリムオン！キョダイマックスです！」

ビートの持つボールが煌き、ブリムオンを収容すると、ビートの顔よりも大きくなる。それを重さを感じさせないフォームで投げ、魔女の居城のような印象を与える、キョダイブリムオンに変化させる。

「最後の問題！チャンピオンの手持ちを全部知ることができるのは?!
チャンピ…！」

「俺だ！」

ビートが言い終わる前に自分自身が、技の相性があるとはいえ、キバナでさえ一体しか判明させ得なかったチャンピオン、ユウリの手持ちを全て明かすと宣言する。

「イオルブ！ダイマックスだ！」

ホープもイオルブをダイマックスさせ、二体のポケモンが相対する。

「クイズの答えは正解！特大のサービスです！」

キノコに隠れたギモータちがその姿を惜しみなく露わにし、胞子を紙吹雪のように舞い散らせる。

「イオルブ！ダイホロウ！」

イオルブの発光器官から禍々しく暗い光を宿す光球が放たれ、きのこの胞子がそれをより強く発光させ、ブリムオンに向かって集中砲火される。

ブリムオンの体力が全て奪われ、キョダイマックスのエネルギーを噴射し、爆煙さながらの様子を呈しながらその身を元の大きさにする。

ビートは目を回すブリムオンを手元に戻し、賞賛を送る。

「おめでとう、あなたの強さ、しっかりと皆さんに伝わりましたよ」

ホープはジムリーダー、ビートに勝利した。

キルクスタウン

通年雪が降り、寒波に見舞われるキルクスタウン周辺は、20年の時を経て、雪景色は少なくなり、かわりに張り詰めた乾いた寒気とあらが体を冷やす空間となっていた。

8番道路の乾いた砂地との大きな違いに、驚きながらホープは、その雪景色が見える前に立っている宿屋にいた。

丁度乾いた砂地と寒気が両立する場所は、キルスクタウンまで歩いておおよそ一日程度の場所にあり、キャンプには厳しすぎる気候にもかかわらず、キャンプせざるを得ない位置にある。

ジムチャレンジの復興のために、一番道路の道具屋然り、ジムチャレンジャーに対してのサポートが受けられる施設が多くなっており、この山小屋もジムチャレンジャーへのサポートという名目で作られたものだ。

そのような施設のほとんどがチャンピオンユウリのメインサポーターであるマクロコスモスの子会社であり、個人経営の店がある程度だが、この宿屋は個人経営のように見えた。

「これから寒くなるし、上着とか買ってくかい？」

「うーん、あんまりかさばらない物がいいけど、高いんですね」

「そうさなあ。いいもんはどうしても高くなるからなあ」

例に漏れず、ホープもこの宿で一泊し、出立の準備をしていた。

ホープは、キルクスタウンからスパイクタウンに向けて防寒着が必要と言われ、目の前のカタログに目を通して見る。

いずれも企業のロゴが入っており、マクロコスモス社のものは比較的シンプルであり、機能性のものが取り揃えられている。しかし、ホープが一番気になったのは、ムゲン団も防寒着を売り出していることだ。

「ムゲン団も防寒着を出してるんだな…」

ふと呟いた言葉に店主は珍しいかいと一言置き、説明をする。

「ムゲン団はエネルギー事業をやってるからなあ。そういうエネルギーの保存とかの技術でできた副産物らしい。マクロコスモス社の

ものとあんまり変わんないのに安いからおすすりめだな」

「ふーん。あんまり見ないから知らなかった」

「まあ、ムゲン団は団員にしか物を卸さないからなあ」

「ということはおじさんもムゲン団なのか？」

「昔世話になってな。いまは支援者の形だな」

「ふーん」

しばらく談笑したのち、ホープはどちらでもない革ジャンに似た見た目のコートを注文する。単純に、首元が暖かそうという理由であったが、妙に自分に似合う気がして決めたのだった。

店主は在庫を確認するために店の奥に引っ込む。

「最初のイメージとは違うなあ」

チンピラがムゲン団を名乗っていたのが初めて、今までホープが見てきたムゲン団は小悪党という印象が強かったが、世間一般から見れば、それが一部であると分かっていた。しかし、体験が考えに優先していたため、このような場面でムゲン団の活動を見るのは新鮮であった。

ふと、階段から誰かが降りてくる音が聞こえ、手持ち無沙汰になったホープはその方向へ向く。

「ホープ…」

その視線の先には、マクロコスモス社の防寒着を着て寒波に備えようとしているグローリアの姿であった。

「…同じ宿にいたんだな」

「うん。これからキルクスタウン？」

「ああ！見てくれ！ジムバッジも結構集まったんだぞ！」

店主の出すモーモーミルクを飲みながら、ホープは、自身とポケモンの努力の証をグローリアに見せる。

その表情に何かを感じたのか、グローリアは一瞬、表情を硬らせるが、順調に進むホープを称賛する。

「すごいねホープ」

「へへん！」

「お二人さん、お熱い所済まないが防寒着が用意できたよ」

店主が茶々を入れるように店の奥から真新しいジャケットを取り出す。

プレゼントをもらった子供のようにホープはそれをすぐに着込む。深緑の生地と薄く黄土色の入った毛皮は、グローリアにとって非常に見慣れていた物で、とある人物を想起させる。

「どうだ！似合ってるかな？」

爛々と目を輝かせるホープに一瞬我を忘れていたらグローリアは、一瞬震えかける唇を無理やり押し殺し、一言だけ感想を伝える。

「うん。凄く似合ってるよ」

それだけ伝えると、グローリアはキルクスタウンに向かおうと言い、ホープを連れ出す。店主は暖かいものを見るような目でを送り出した。

・ゆけむりこみち

キルクスタウンに差し掛かるゆけむりこみちも氷河が融け出した影響により増水しており、氷タイプが住む場所から、水タイプの中でも低温耐性の強いポケモンが多く生息するようになった。

それでも氷タイプのポケモンは少なくなった氷河を、己の技によって氷塊に変えたり、あられを交代して使うことにより、20年前とあまり変わらない生態系を維持していた。

ポケモンによる異常気象が常時発生しているが、ポケモンレンジャーが派遣されないのは、20年前に同じ光景が自然の力によって作られていたため、害はないと判断されたためである。

しかし、内部を見ると、あられを維持するには多くのポケモンが共存状態でなくてはならず、危うい均衡が取られているのは誰の目から見ても捉えられた。

そのあられが降る中で、二つの集団が対峙していた。一方はネズを中心とした元エール団たちのムゲン団を名乗る集団で、もう一方は喪服のようなデザインをしたオリーヴを先頭としたムゲン団の人間だ。「わざわざチャンピオンとローズ委員長長の秘書を兼任されてらっしゃるオリーヴさんがなんの御用で？」

「無論、その大きな荷物のごとで」

元エール団の一人、パンパンに膨らんだ大きなバッグを背負った男を指し、冷徹な目を向ける。

「スパイクタウン分団から提供されるねがいぼしが活動に反して圧倒的に少ないのですが。ええ、ちょうど今までの合計がその鞆程度、前回の提供がアラバスクタウンの興行の後と記憶しています。一回でそれだけ採れるのに何故、わざわざ内部に留保するのですか？これでは計画に必要なねがいぼしが揃いません。提出して下さい」

「うちはちゃんと提供してるんですが。別にノルマはねえんですし」
そう言って値踏みするような冷やかな視線を送るオリーヴに、若干の苛立ちを隠さないネズは、ボールに手をかける。

「…」
「…」

しばらくの睨み合いのうち、オリーヴは眉をひくつかせてその沈黙を破る。

「…詮索はやめます。単刀直入にいいいます。スパイ行動は感心しませんよ？」

「別にやましいことが無ければ、スパイなんてしませんよ。過去の改変なんて大事を考えなければ」

「あなたは賛同してくれたと思っていたのに。嘘をつくなんて酷い人ですね」

「ええ、酷い人ですよ。あくタイプが好きなんです」

一切傷ついた様子が見えないオリーヴは、懐からモンスターボールを取り出し、射抜かんばかりに願い星の詰まったバックを見つめ、構える。

「エンニユート、あの男からバッグを奪いなさい」

白磁のような色白の冷徹な顔を般若のような形相に変え、ボールから黒く艶やかな肢体をしたポケモンを繰り出し、バッグを背負った元エール団に迫る。

「ちっ！カラマネロ！リフレクター！」

逆さにした烏賊を思わせるポケモンをネズは繰り出し、襲いかかる

エンニユートの前に光板を作らせ、バッグを守る。

「何故ですか？スパイクタウンの復興、エール団の暴挙の阻止、あげればキリがないはず」

かつてネズの妹であるマリイのジムチャレンジで、スパイクタウンのジムトレーナーで作られたエール団は、ジムチャレンジの妨害を行った。加えてジムリーダーであるネズでさえも、ジムを閉鎖するという異例の事態を起こした。

幸いにも物的被害が無かったことと、そもそもジムチャレンジにおいてスパイクタウンまでたどり着ける人間が少なく、公開されたスタジアムでもないことから、大きく取り上げられなかったが、本来であればマリイでさえも処分対象となるほどのことである。

「ええ、たしかにアレは消したい過去ではありませんね」

マリイがジムリーダーに就任するということで、ネズは引退したが、それ以外にもジムチャレンジ期間にジムを封鎖したということとで実質的な解任を迫られていたこともある。

ブラックナイトがなければ、その時のジムチャレンジではスパイクタウンとマリイの関係で取り沙汰されたことは想像に難くない。

「しかし、マリイもそれで成長してくれました。失敗も成功もあつての今があるんです。今度そんな感じの曲出すんで聞いてくれませんか？」

挑発しながら折りたたみ式のマイクを取り出し、ボーカルのような立ち姿になる。いつものバトルスタイルになったことで、オリーヴは完全に臨戦態勢になったと察し、ほかの団員に指示を出す。

「誰一人逃がさないように。皆さん、形式的なバトルは不要、思う存分に戦いなさい」

そういうと団員はモンスターボールから様々なポケモンを出してゆく。デリバードやミルタンクなどのバトルよりは人との生活に寄り添うポケモンから、歴戦であろう傷が残るキリキザンや装甲の一部が欠損したクレベース、寡黙に見える中年トレーナーの趣味とは全く逆であろうヒールボールから繰り出されるキルリア、少年トレーナーとは不相応に覇気を纏うバクオングなど、全くの統一感のないポケモ

ンたちが並ぶ。

「…一癖も二癖もある面々ですね。みんな！撤退優先ですよ！」

元エール団からは、ジムトレーナーの名残からか、あくタイプを中心としたポケモンが繰り出され、撤退戦が始まる。

煙幕が撒き散らされ、砂塵が舞い、あられが降るといふ異常な中でバトルは当然のことながらに乱闘となったが、オリーヴとネズの戦いだけは、他とは実力が違うのかその場に乱入できなかった。

引退したとはいえ、リーグ用のポケモンを常に持ち歩くネズはトレーナーとしては上位に存在し、並のトレーナーでは一体突破することも怪しい。しかし、オリーヴも歴戦のトレーナーであり、まさに一進一退の攻防が繰り広げられた。

「…元ジムリーダーともあろう人間が4体しかポケモンを持っていないなんて、おごりですか？」

「…実は強かったりするんですね、あなた」

長いようで短かったバトルが終わり、ネズの長年の相棒であるタチフサグマ、カラマネロ、ズルズキン、ストリンダー達が尽く目を回して倒れる。

対するオリーヴの手持ちもダストダスを除いて戦闘不能に陥っていた。しかし、ダストダスの手には、バッグを背負ったエール団が捕まっていた。

戦いの余波でお互いの服は乱れているが、お互いに焦燥感はない。

「ねがいぼしは回収させてもらいますよ」

ダストダスの大きな手の中には、バッグを背負った元エール団が抱えられており、その手をバッグに手をかけた瞬間、ネズが大きく息を吸い叫ぶ。

「ナイトバーストだ！ゾロアーク！」

その言葉に反応して、元エール団の男から悪意の具現化のような、それでいて夜の帳のような洗練された静けさのある波動が放たれ、ダストダスはその手を弾かれる。

「だましうち、ですよ」

「…オリーヴ、キレそう」

ダストダスの手元から離れた男はその姿を空間を歪めながら元の黒い体をもつポケモン、ゾロアークに戻る。

「お互い手持ちは1体、アンコールバトルしますか?」

「ネズのバトルにアンコールはない。昔の貴方から見たららしくないですね」

らしくないと言われたネズは自嘲する様に首をもたげ、鋭い目でオリヴを見つめる。

「こちらもある程度情報が欲しいんでね。誰です、首謀者は。勝ったら教えてもらいますよ」

(カラマネロ:ポケモンの中でも強力な催眠能力を持つ:負けられないわね)

お互いに最後のポケモンが睨み合い、二人は同時にポケモンの技を叫ぶ。

「ゾロアーク!じんつうりき!」

「ダストダス!ドレインパンチ!」

ゾロアークから放たれる思念波と、ダストダスの気の流れが可視化された触手が弾ける。

「...やはり、おごりでしたね」

ゾロアークの思念波を破り、ゾロアークの鳩尾に直撃したグロウパンチは、ゾロアークの意識を刈り取っていた。

あたりの団員たちも息絶え絶えであるが、お互いにトップの勝敗がついたとなり、ポケモンを戻す。

「スパイと知った以上、聴取させて貰います。誰に秘密を話したかも知りたいので」

そう言っただけオリヴはネズの元に歩み寄る。

(...)までですか...

オリヴは冷静ではあるが、自分の信奉するものにたいしての奉仕であればなんでもできる凄みがある。事実、単なる研究者が自力によつて副社長としての激務に対応するという凡人ではできないことをやってのける人物だ。

ネズはオリヴのダストダスの触腕が迫るのを待つ。

しかし、それが彼を掴むことはなく、目を開ける。

「どうしたんです？」

そう言おうと声をかけると同時にオリーヴの顔を見ると、複雑な表情で遠くを見つめるオリーヴがあった。

ネズもその視線の先を確認する。

「ホープ……」

その先には、先の騒ぎによって駆けてきたであろう、息を切らしながらオリーヴとネズを見つめるホープとグローリアがいた。

キルクスタウン2

「どうということなんだ…」

ムゲン団とエール団が元になったムゲン団の抗争の後は、普通のバトルではなく、野良バトルのようなルールのない惨状を見せていた。土手は崩れ、草は燃え、木々はびしょ濡れになっている。謎の圧力によってえぐられた地面など、明らかな乱戦の後が見て取れた。

その中心の最も地面の破壊が著しい場所に二人がいた。

「ホープ、きちやいけん。これは私の問題です」

「お知り合いですか？生憎これはムゲン団としての問題。部外者は立ち入らぬように」

お互いがホープに話に入ってくるかと告げる。

「…」

グローリアは何も言わずにその二人の姿を見る。グローリアに向けられる視線は、どちらの味方につくかで形勢が変わるといった表情である。両者ともに、グローリアがユウリであると知っている。

緊張の続く時間が流れる。ホープは気がついていないが、ホープの発言一つでユウリがどちらかにつくか、その場の人間が察していた。それも、ユウリがずっとホープを見ているからである。

「仲裁が必要ですね」

その言葉とともに、第三者が現れる。

「キルクスタウンは私のホーム、そんな庭先で騒がれるとカチンときますね」

ゆっくりと歩いてくる恰幅の良い中年が現れる。ユニフォーム姿であるが、灰色のジャケットに、スポーツサンングラスという出立と、整えた顎髭にオールバックという相貌は、貫禄とプレッシャーを放っていた。

「マクワ…」

「ジムリーダーのお出ましですか」

「ジムチャレンジ中に騒ぎを起こされると困るんですよ。エール団の時みたいだね」

20年前にエール団は、カジリガメを利用した妨害を行ったことがあり、寒風と潮風が吹く9番道路で待ちぼうけをくらったチャレンジャーのいくつかは低体温症手前までいった人間がいた。

そのため、キルクスタウンにとってジムチャレンジャーの妨害に対して非常に敏感であり、苛烈とも言える制裁を与えた機会もあった。

「大人の争いは子供には悪いですからね。お二人とも、ご同行を」

そう言いながらマクワは連れてきたジムトレーナーとともに満身創痕のポケモンたちを取り囲み、そのまま連行してゆく。

残された戦いの後は、ほかのジムトレーナーたちがじならしやいわくどきと言った技で修復を行なっている。

「…」

「…」

一連の騒動の後で、何も話せない二人はじつとその様子を見ていたが、ホープは何か考えた後に、グローリアに話しかける。

「こういうのはさ、他の人が口を出しちやいけないってわかってるんだ。

だけど、俺はネズさんが意味もなくこんな無茶な戦いをする人じゃないと思う。

だから…」

「ムゲン団には行かない方がいいと思う」

ムゲン団に真相を聞きに行く。そう言いかけたホープを先にグローリアが制する。

「今はジムチャレンジャー中だし、貴方がそこに行つたとしても、門前払いされるのがオチだから」

単なる少女から、責任ある立場になってしまったグローリアは、内部紛争を外部に漏らすことがないように徹底することは、どの組織でも同じであると知っている。

例え、それを公開するとしても、一般人が疑惑を持つてからでしか公開しない。わざわざ煙のないところから火を自分からつけに行くのではなく、煙が出てから火が出たように見せかけるのが、自然なためだ。

「一番良いのは、マクワを倒してあらましを聞くことがいいと思う。キルクスタウンの騒動だから色々調書も取るはずだから」

「けど、そんなバトルを手段みたいに…」

ホープは、ポケモンバトルを情報の手段として、ましてやジムチャレンジにそれを持ち出すことに抵抗を覚える。

ジムチャレンジはユウリの台頭から神話性を作ることによって繁栄を維持しようと試みていた。

その反動で格式高いルールが明確化されたポケモンバトルを神聖視する人間も多い。なまじ伝説のポケモンがユウリとホップによって立証されていることから信仰が芽生えていた。

それに加えて王族が現代まで制度として存在するガラル地方は、他の地方と比べて宗教色が強かった。外見はスポーツや興行じみたジムチャレンジも、神聖を意識したことによってそれを促進させていた。

ユウリは一つ自身の後ろめたい感情が芽生えたように、視線を一瞬ぶれさせ、ホープに言い聞かせる。

「バトルは手段であって、方法じゃないよ。だから、…頑張つて」

長く話したかったが、高説垂れるほどに自分に自信のないグロリアは、一言だけ心からの声援を一言言つてその場を後にする。

「…バトルは手段じゃない、か」

若いホープに手段と方法の区別はあまりわからなかったが、少なくともグロリアからは、バトルして全てが分かるとは言わなかったことだけは理解できた。

・キルクスタウンジム

キルクスタウンジムの更衣室でホープは再びタウンマップを見直し、マクワの情報を見直す。

『キルクスタウンとマクワ』

年々氷河が溶け出していると言われているキルクスタウン周辺だが、その環境を維持するべく野生のポケモンたちはあられやれいとうビームなどの技で氷河の溶解を防いでいる。

そのため、付近のポケモンのレベルは高く、すぐに技を放つ癖がつ

いているため、好戦的。

ジムチャレンジも大詰めというところだが、その環境を突破して進める気概のある人間を選別するマクワもまた、レベルが高い。

マイナーリーグに母親が氷タイプのジムリーダーとして在籍している』

「親がジムリーダー…」

ホープは不意に自分とマクワを重ねる。ホープはマクワとメロンの不仲説を知らないが、ポケモンバトルが強い親を持つという共通点では、何かシンパシーを感じるものがあつた。

「…聞きたいことばかりだな」

ネズのことはもちろんであるが、それに加えて、親と同じ職になつた人間の、その理由を聞きたかつた。

ホープには、漠然とチャンピオンを倒すという以外の考えはなく、父親はジムチャレンジの過程でチャンピオンになることから研究者になることを選んだ。

自分もその道を辿るのか、それとも別の道を見つけるのか、漠然とバトルによつて見つかると感じていたホープであつたが、グローリアに方法と手段は違うと言われ、一度考えを改めていた。

「よし、いくぞー！」

ジムミツシヨンの開始時間が近づき、頬を叩く。

例年と同様、砂嵐の中でダウジングを行いながらバトルを行うという独特の環境との闘い。集中力・文明の力を要しない原始的な直感の双方からなるそのジムチャレンジは毎年ふんだんに組まれた予算からルートが変更される。

大型のパズルのような装置とねばねばネットで補強された空洞の上に砂や岩を被せた単純な作りだ。しかし、単純であるからこそドツボにハマった時が抜け出せない。磁気を持ったダウジングマシンが地中の装置に仕込まれた磁石を検知する仕組みだが、手汗や砂嵐の不快感で狂う手元は己を律するものからこそ幸運を運ぶようであつた。

それを観客席から見ると2人がいた

「…あなたと横に座つて観戦させるとは、なかなかマクワくんも性格

が悪りいですね」

「変にホテルに軟禁しても内通者がいればすぐに出られますからね。お互いに」

モンスターボールをつけるホルダーを空にされたネズとオリーヴはお互いに牙を抜かれた様子でホープを見る。

お互いにあくまでポケモンバトルをしていただけであり、乱戦になったというのがあらましとした。ユウリがジムチャレンジャー出会った時であれば、白黒つけるのがお互いの性分であったが、ネズはミュージシャンと現ジムトレーナーの兄という肩書き・オリーヴはチャンピオンユリーの秘書であり、マクロコスモスの実質的な役員であるため大ごとにはできなかった。

手持ちのポケモンはマクワにより、保護されており実施的な担保として確保されている。

「まあ、ここらで腹を割って話しましょう」

「ええ、そちらからどうぞ」

「…まあいいです。どうせ私の目的なんて知ってるでしょうから」

「独自にねがいぼしを集めてどうするおつもりで？」

「手段は分かっているなら目的はわかりませんか？」

「…」

「沈黙は金ですが、沈黙の肯定という言葉もありますよ」

「…」

意向返しのようにオリーヴは沈黙して太ももをテーブルがわりに頬杖をつく。視線の先にはホープがいた。

「ブラックナイト、ネズの前でアンコールはさせませんよ」

「そんな陳腐なものではありません。そもそもブラックナイトは単なる無限のエネルギー確保のためにムゲンダイナを活性化させることを指すもの。かつてのローズ元委員長はその先であるムゲンダイナの捕獲による無限エネルギーの確保を目的としていました。千年先という方向さえ違う…」

そこまで言い放つとオリーヴは失態とばかりに口を塞ぐ。技術屋として研究者としての相手の間違った認識に訂正を入れなければな

らないという性分と暗にお互いにある程度目的が分かっていることが災する。

「オリーヴ…ダメな子…」

そして、目の前にある少年がその決壊のトリガーを引いたのだ。

「千年先の方向の違い…千年先…未来…未来の方向…平行…過去…過去？」

今ほどの失言とそれに過剰に反応したネズは思い当たる節の単語をいくつもつなぎ合わせる。

「ムゲン団の個人スポンサー、特に出資してる人は皆何か影があった。何かを後悔して…！」

「オリーヴ！あんたらあ！」

「それ以上は言わないで下さい…」

オリーヴの肩を掴んだネズはその顔を睨む。オリーヴは先程失態とは別の安堵の顔を一部見せていた。

「…なるほど『何も失ってない』側の人間ですね。あなた」

「ええ…だから」

オリーヴはスマホロトムでメモを入力し、ネズに見せる。

『私は彼の方に信用されてない。聞かれたくないから此方で失礼します。』

ブラックナイトを超えた計画、バックナイトを止めて』

キルクスタウン3

雪国と称されたキルクスタウンは既に降雪エリアと言われるほどに、寒さが和らいでいる。ガラルの発展とともに温暖化が進み、かつては道端の瓦礫のように溜まっている雪塊も、踏みしめられた柔らかい雪に変わっている。

その町にあるジムも同様であった。かつては熱気よりも寒さが勝ち、観客は皆上着を着ていた。しかし、今はジムのサポーターユニフォームのみを着ていても試合後は熱くなって汗で湿るほどである。その熱の中心に、スーツを着ればどこかの企業の重役か代表とも言える出立ちの中年マクワと、ジムミッションに挑みとあることを聞くとうたとどり着いた少年がいた。

「ホップの息子だけはありますね。なかなかの根性です」

どこか煽るような表情でマクワはホープを見据える。

「…そのことで聞きたいことがあるぞ!」

「おや?なんででしょうか」

「親と比べられるとマクワさんはどう思うんだ?」

「…ビート君よろしくクイズ形式でいきましようか」

親がリーグ準優勝、それも無敗の女王と呼ばれるユウリの世代で、かつポケモン博士であるホップを親にもつホープ。対するは氷タイプのジムリーダーを母とするマクワは、懐かしいものを見て問答する。

「ポケモンの知識を褒められるときは?」

「…さすがメロン（ホップ）の息子!」

すかさずホープも同じ質問を返す。

「バトルで勝ったときの相手の子のセリフは?」

「親がジムリーダー（ポケモン博士）だから勝てるんだ!」

「ハハハ、君はよく似ている。しかし、僕とは少しそれを煩わしく思っていないようだ」

「環境ってやつもあるからな!」

「最近の子は変に水っぽいなあ」

「現代っ子で言つてほしいぞ！」

「じゃあそんな水ものが焼け石に当たった時、どうなるか教えてあげましょう」

お互いにボールを構え、審判の声と同時にポケモンを繰り出す。

「行きなさい！イワパレス！」

「行くぞ！ルンパツパ！」

水流と土石流が混じり合うスタジアムに二人、端末に夢中になっている人間がいた。

オリーヴとネズである。その雰囲気は試合が彼らにとつてつまらないものではなく、それ以上にその端末に入力される文章が重要であつた。

『バックナイト、それは書いた通り戻りの夜。ブラックナイトが未来に希望を渡す夜であるならば、バックナイトは過去に希望を押し付ける夜』

ネズはピッタリと唇を閉じたオリーヴを見遣り、自身も端末に入力し、筆談に移る。

『聞いている限り過去に戻る方法ですかね。ムゲンダイナのエネルギーがあれば可能かも知れませんが、狙った時間・空間はどうするんで？』
『伝説のポケモンを使います。セレビイ・ムゲンダイナがこの計画の鍵となっています』

セレビイとムゲンダイナという単語にネズは訝しむ。おおよそ途方もないエネルギーと時渡りの性質を用いた物であろうと推測されるが、それよりも単純なものがある。

『シンオウ地方の神話に出てくるディアルガ・パルキアを用いれば、時間・空間を自由に扱えるのでは？』

『あの2柱は力が強すぎて制御ができる可能性が低いのです。かつてシンオウ地方のとあるトレーナーが1柱を手中に置いた記録がありました。それは様々な要因があり、かの1柱が捕まえる許可を気まぐれに出したからです』

『つまり捕まえる機会さえないと』

『その通りです。そこで利用するのがセレビイです。並行世界とはどこに存じますか?』

『ええ。とある事件で知りましたよ。よく絵物語でもありますね。とある分岐点を以っていくつもの、もしかしたらの世界のことですね』
『ええ。ここで問題なのが、過去に戻った場合、改変がある世界と改変がなかった世界が生まれ、本質的な救済ができない…という問題です』

オリーヴは手首を休ませるように掌を振り、ホープの方を見る。

『しかしセレビイはそれを無視できます。今まで観測されたセレビイは未来でつけた傷を過去に古傷として存在していたのです』

その単語にネズは思考を巡らせる。オリーヴの荒唐無稽な話を真摯に聞いているネズは一つの結論に行き着く。

『セレビイは平行世界を選べる存在ってことですか?』

『違います。セレビイが通った道が世界の本筋となるのです。その後の世界は木の枝のように他の世界と融合したり、細くなって消えます』

『その節が立証される材料はなんでしょうかねえ』

『ダイマックスアドベンチャーです』

ネズの手が止まる。ダイマックスアドベンチャーは、冠の雪原に存在する不思議な巣穴を探検・調査することの総称を表す。現状、出現する殆どの伝説のポケモンは、有利によって捕獲・戦闘不能にしている。

『ダイマックスアドベンチャー出てくるのは伝説のポケモンですが、いずれも各種地方の伝説のポケモンと比べて弱い。それも人の手で収まる範囲に。それはなぜか。一般的に伝説のポケモンというものには各々の権能を有しているとされていますが…』

怒涛の勢いでオリーヴはスマホホトムをタップし文字を入力する。元々が研究者であり、理屈屋な彼女からすれば、1から10までの説明をしなければ済まないが、音楽というフィーリングを知識と経験で舗装する思考のネズは自動音声の読み上げよりも早く作成される分に目をチカチカさせていた。

：以上が仮説：劣化同位体理論と権能と世界構築の追従性に係る考察とその理論を応用した時間軸の変性計画です』

数十分間無呼吸で喋り続けられたような内容をネズは何度もスクロールし、それを確認する。

『つまり、

1. この世界が並行世界の本筋と確定するためにセレビィを獲得
2. セレビィと共に時渡りをし、ムゲンダイナのエネルギーで、時渡り途中で本筋にならなかつた過去に無理やり到達する
3. 到達したことにより、到達した過去と本来の過去が融合する
4. 融合の際、ムゲンダイナのエネルギーを使い、到達した過去のエネルギー量を多くすることで、本筋の過去より優位に立ち、結果到達した過去に合わせて未来が変わる。

ということですかい？』

『概ねその通りです。』

理解したネズは大きくのけぞり、こけたほおをなぞる様に、顎を撫でる。

(リスクが大きすぎる)

ネズの第一印象はそれであった。話自体荒唐無稽ではあったものの、過去を変えろという方法はポケモンを使えばなんとかなるというのがこの世界でまことしやかに言われている。

特に、キルクスタウンと同じ雪国であるシンオウ地方には、過去にタイムスリップした少女が存在するという伝承があり、それを裏付ける珍妙なデザインのスマートフォンのようなものが発掘されている。

しかし、失ったものを取り戻すには失敗のリスクがある。

試行回数が限られるリスクがある。次元に穴をあけるほどの力を持ったムゲンダイナなど、ブラックナイトを知っている人間からすれば、「あり得なくはないが一度しか使えないであろう」というのが結論だ。以下に莫大にエネルギーであろうと、ムゲンダイナに特別な権能はない。あくまで利用方法が莫大なエネルギー源であり、その利用もムゲンダイナの状態から鑑みれば、再利用出来るほどの回収効率はない。

ムゲン団の目的が過去を改変し、失ったものを取り戻すことであると、ネズ独自の調査からわかっていった。ムゲン団の高額出資者の殆どの出資財源が遺族年金であったり、保険金、はたまた到底本人が収集しないようなコレクションの売買益であったことから考えられた。

しかし、今の話からすれば、目的に対して方法が杜撰すぎるのだ。パルキアとディアルガ双方のポケモンを使えば、死者がいなかった世界を作るのは簡単で、時間と世界の境界から操作でき、直接過去に触れずに世界を選べる。

しかし、ムゲン団の方法では、バタフライエフェクトを期待するような形で、確定はしていない。しかも一度だけのチャンスである。

よほど一つの可能性を潰せば、思った結果が出てくるという場合のみしか、過去が変えられない。

「あんたらあ、本気でムゲン団全員を救う気はねえな」

「ええ。出資者の方々はあくまで協賛者ですから」

「なるほど…」

些細な願いのためにここまでの人を巻き込む。その執念深さとそれを許す幹部たちにネズは絵も言われぬ恐ろしさをムゲン団のマークから感じた。